

法政大学
国際日本学研究センター
国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.16 Apr.2012



C O N T E N T S

国際シンポジウム報告	2
研究会報告	11
東アジア文化研究会報告	19
勉強会報告	31
講演会報告	37
新刊案内	40

2011年10月2日(日)

国際シンポジウム

「日本の国家アイデンティティの形成と「土着性」の問題」

(法政大学市ヶ谷キャンパス

ポアソナード・タワー26階スカイホール)

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

国際シンポジウム

日本の国家アイデンティティの形成と‘土着性’の問題

●日 時：2011年10月2日（日）10：00～17：30

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー26階 スカイホール

*このシンポジウムは「アジア・フランコフォン大学」（9月29日～10月1日：日仏会館）への協賛企画としてフランス大使館との共催で、またパリ INALCO、中央大学からの協力を得て開催された。

文字通りに「その地に生まれた」を意味する「土着性（オートクトニー）」という語はギリシャ思想の鍵概念であり、後にフランス語の中にも導入されていくが、マルセル・デチエンヌの分析によれば、この語こそが西洋における「国家アイデンティティ」構築の基礎となったものである。この土着性の概念は、日本の国家アイデンティティを考える際にも有効であろうか。この問いかけを軸に、シンポジウムでは、比較の観点から、デチエンヌが明らかにしてきた国家アイデンティティ形成のメカニズムと、日本における各時代のアイデンティティ形成の実際との重ね合わせが試みられた。

当日の報告者は、発表順に、マルセル・デチエンヌ（ジョンズ・ホプキンス大学）、ヨーゼフ・クライナー（法政大学）、アラン・ロシェ（EPHE〔国立高等研究院〕）、渡辺浩（法政大学）、フランソワ・マセ（INALCO〔国立東洋文化研究所〕）、星野勉（法政大学）の6氏が司会を安孫子信（法政大学）が務めた。

まずデチエンヌ報告「国家アイデンティティの形成と土着性の変遷」では、古代ギリシャのアテネで生まれた土着性概念が、当初からイデオロギーとして自国民の純粋性を称揚し他国民の雑種性を蔑む政治的意味合いを有しており、戦死者を弔い自国史を語るといった擬制に伴われてその後も世界各所で養分を与えられ続けていった過程が示された。

続くクライナー報告「日本民族・文化の多様性」では、日本の民族的・文化的土着性が文化人類学的視点から批判的に吟味され、それが決して純粋一途なものではなく、日本で土着のものと言えば、二民族（大和民族、アイヌ民族）、三文化（日本本土文化、沖縄文化、アイヌ文化）を数えうることが示された。

またロシェ報告「日本神話における天の主権と土着者たち」では、古事記や日本書紀の国家の起源を扱う神話部分で、国家発祥の地である大和は神武天皇によって土着民から勝ち取られたものであると明記されていることから、日本の国家アイデンティティの核に土着性が持ち込まれていないこと、しかし土着民は階層化されて、主権がその地で確立され正当化されていく中で、主権のいわば引き立て役としてさまざまに取り入れられていったことが示された。

さらに、渡辺報告「この「国」の起源—本居宣長の思想とその影響」では、明治天皇制国家に結実していく国家アイデンティティ思想が、土着性に根付くということを超えて、国土自身を生みだした神々の子孫が今も天皇として統治し、当初からの臣民の子孫が今で

も臣民として服しているという、独自の歴史観に基づくものであることが示される一方で、このような思想が、江戸時代、儒教を掲げての当時の中国中心主義への反発から本居宣長によって構想されたものであり、それが明治期に、今度は西洋社会におけるキリスト教に代わるべきものとして伊藤博文によって採用されていったという、外発的な形成物であることも指摘された。

さらに、マセ報告「山鹿素行『中朝事実』における中華思想の乗り越え」では、江戸時代、中国儒教による日本社会の支配への反発から、本居に先だって、山鹿素行がまず、儒教思想が生まれたのは中国ではなく日本であり、皇統の最初期にすでに徳治が実現されていたと主張したこと、しかし、その主張では、中国儒教の徳治はモデルとして維持されており、しかも政治の実権からは天皇が全く遠ざけられた中でそれが主張されたという矛盾が生じていることが指摘された。

最後に、星野報告「和辻の日本古代文化論における倫理意識の原型」では、和辻が、日本文化が周辺文化として大陸中国からの文化移入に依存しつつも、自己を独自に開花させていった力を優れた内在の力とみなして評価したこと、その内在の力の核にあるものを清明心として認め、それは天皇を崇拝する心と重なるものであると主張したことを紹介しつつ、そのような和辻へは、清明心と天皇制との結びつきを律令制当初から言うことはできずそれは天皇が政治的実権を失っていった中世以降のことに過ぎないと主張する批判があることも、同時に指摘された。

こうして、デチエンヌのモデルを念頭に置きつつ、日本のアイデンティティの主張の内実が、古代（ロシェ）、江戸時代（マセ、渡辺）、明治（星野）、現代（クライナー）のそれぞれで検討されていった。結果として、アイデンティティを言うために純粋な土着性をそれとして称揚するケースは見当たらなかったと言い得よう。ただし、それらは大方どれも、天皇・天皇制を軸にして、何らかの歴史的永続性の主張を含むものであることは確かである。しかも、どれも、外国との対抗を陰に陽に前提にしたものであった。そうであるから尚更、現代、文化人類学の立場からのクライナー報告が、ある意味で土着性を言いつつ、天皇制も外国も持ち出さずにアイデンティティを論じ得ていたことが注目されたのである。

【記事執筆：安孫子 信】

（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’:
into the Future”

International Symposium «Formation of Japanese National Identity and the Issue of ‘Autochthony’ »

Date: Sunday, 2 October 2011, 10:00-17:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade
Tower 26F Sky Hall

The word “autochthony” meaning “born in that land” is a concept from Greek thought, and according to Marcel Detienne’s analysis this word itself is the founding block of “national identity” in the West. Does the concept of autochthony have any significance when considering national identity in Japan? The symposium centered around this question from a comparative perspective, attempting a

superposition of the structural theory of Japanese identity upon the structural mechanisms of national identity as revealed by Detienne. The cases raised were ancient myths (Alan Rocher), Yamaga Soko (François Macé), Motoori Norinaga (Watanabe Hiroshi), Watsuji Tetsuro (Hoshino Tsutomu) and cultural anthropology (Kreiner). The result was we were unable to find any one example that we could call autochthony equivalent to identity. However, the majority of cases are given permanence through the centrality of the emperor and emperor system. Therefore it is noteworthy that Kreiner’s report from the viewpoint of cultural anthropology was able to discuss identity in relation to autochthony without mention of the emperor system.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies;
Professor, Faculty of Letters)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④“对日意识”的
三角测量——面向未来

国际研讨会

日本国家认同的形成和“本土性”

时 间：2011年10月2日（星期日）10:00-17:30
会 场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 空中大厅

“本土性”一词是来源于古希腊哲学思想的重要概念，意为“产生于该土地”。Marcel Detienne教授认为，这个名词才是构成西方社会“国家认同”的基础，也因此“本土性”概念对于考察日本国家认同意识的形成也应该有效。出于这一假设，此次研讨会试从比较观点将Detienne明

确的国家认同形成与日本国内价值认同形成过程加以鉴别和重合。会上发表的内容及被提出的论题包括古代神话(Alain Roche)、山鹿素行(Francois Masset)、本居宣长(渡辺浩)以及和辻哲郎(星野勉)和文化人类学(Kreiner)等。

而究其结果，并没有找到讨论价值认同所需的纯粹的“本土性”要素。然而，报告中涉及的要素内容均以天皇、天皇制为主轴，或以某种形式主张其永恒性。其中，从文化人类学视点出发的Kreiner报告讨论“本土性”的同时并未言及天皇制，却完整的论述了价值认同，值得关注。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구④ <일본의식>의 삼각
측량-미래를 향해

국제심포지엄

일본의 국가 아이덴티티의 형성과 ‘토착성’의 문제

일 시：2011년 10월 2일(일) 10:00 ~ 17:30
장 소：호세이대학 이치가야 캠퍼스 보아소나드타워 26층 스카이하울

‘그 지역에서 태어났다’는 것을 뜻하는 ‘토착성’이라는 단어는 그리스 사상의 핵심개념으로 마르셀 데치엔느의 분석에 따르면 이 단어야말로 서양의 ‘국가 아이덴티티’ 구축의 기초가 된 것이다. 이 토착성의 개념을 일본의 국가 아이덴티티에도 적용할 수 있을까.

심포지엄에서는 이러한 문제 제기를 중심으로 비교의 관점에서 데치엔느가 밝혀 온 국가 아이덴티티 형성의 메커니즘과 일본의 아이덴티티의 형성 논의와의 비

교 고찰이 시도되었다. 내용으로는 고대신화(아란 로셰 발표), 야마가 소코(山鹿素行-프랑수아 마세 발표), 모토오리 모리나가(本居宣長-와타나베 히로시(渡邊浩) 발표), 와쓰지 데쓰로(和辻哲郎-호시노 쓰토무(星野勉) 발표), 문화인류학(클라이너 발표) 등이 다루어졌다.

결과적으로 아이덴티티를 주장하기 위해 순수한 토착성을 아이덴티티라 높이 평가하는 내용은 눈에 띄지 않았다. 다만 발표의 대부분이 천황·천황제를 중심으로 일련의 연속성에 관한 주장을 포함한 것이었다. 그렇기 때문에 문화인류학 관점에서 클라이너 교수의 발표는 토착성에 대해 얘기하면서도 천황제를 언급하지 않고 아이덴티티를 논했다는 점이 주목된다.

【기사집필：아비코 신

（安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수）】



司会：安孫子 信 所長（教授）



マルセル・デチエンヌ 教授
（ジョンズ・ホプキンス大学）



アラン・ロシェ 教授（EPHE）

国際シンポジウム報告

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

2011年アルザスシンポジウム

日本のアイデンティティを〈象徴〉するもの

- 日 時：2011年11月4日（金）～11月6日（日）
- 共 催：法政大学国際日本学研究所（Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS）、フランス国立科学センター東アジア文明研究所（Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique）、ストラスブール・マルク・ブロック大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所（Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA）
- 会 場：アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）

1 シンポジウムの概要

シンポジウムでは、日本側から10名、欧州側から8名の、合計18名が報告を行った。各報告者の論題をTableに示した。

CEEJAでの国際日本学シンポジウムでは毎年統一の主題を設けて報告を行う。今回の主題は「日本のアイデンティティを〈象徴〉するもの」であり、日本人

が日本や日本文化のアイデンティティを表現すべく用いてきた、あるいは、結果として日本や日本文化のアイデンティティを表現するものと見なされてきた様々な〈象徴〉を通して、日本や日本文化のアイデンティティについて、それは存在すると言えるか、存在するとして、それはどのようなものなのかが、日本の歴史、文化、社会を背景に検討されていった。

Table Detail of Symposium

Date	Name	Affiliation(s) and Country	Theme	Language
4th November 2011	Ulrich Hesse	Sanctuary Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, UK	Digging out Identity: Symbols of the Past in Contemporary Japan	English
	Gaëlle Carré	EHESJ, Centre de recherches sur le Japon (France)	L'empereur Jingū: du mythe national à l'occultation	French
	Akiko Koeber	EPHE, UMR 8155 CERCAD (France)	Mythe et idéologie au Japon: histoire d'un malentendu	French
	Robert Bergen	University of California, Davis, (USA)	Michizane's Waka - Ambiguous Symbols	English
	Christiane Sugay	Université de Strasbourg (France)	Representations of Saigō Takamori as symbol of a paradoxical hero	English
	Jusui Kawada	Kanagawa University / Hosei University (Japan)	Aspects moraux et esthétiques de la mort volontaire des Japonais: seppuku, joshi et shishi	French
	Maja Milešić	University of Ljubljana (Slovenia)	Seiōjiki: Japan and Slovenia contrasted	English
5th November 2011	Josef Kreiner	Hosei University (Japan)	L'identité ethnique et culturelle du Japon à travers la culture du riz	Japanese
	Hidekoshi Uchiyama	Hosei University (Japan)	Kyō-gu-ban as a Symbol - The Beliefs and World-view of the Yatsushiro Islanders	Japanese
	Masaru Goda	Meiji University (Japan)	Iha Tōru, pioneer of Okinawan Studies and the humanities during the Meiji Era	Japanese
	Josef Kihara	CNRS, UMR 8155 CERCAD (France)	The talismans of the Emperor: a certificate of being Japanese	English
	Takatoshi Hoshino	Hosei University (Japan)	What is the meaning of the Emperor being the symbol of the unity of the Japanese people?	Japanese
	Yusaku Suenomura	Hosei University (Japan)	Kokutai as the Principle of Liberalism - Ichikashi Tanaka's Discourse of the Prewar Period	English
	Shin Akiba	Hosei University (Japan)	Mimi Amami et le Rire: impérialisme, soldats et marins	Japanese
	Maria Sagrada De La Nuez	Université Michel de Montaigne (France)	La fantasmagorie et le kimono dans <i>Le Grèce contemporaine</i> (1854) d'Edmond About et dans <i>Japonisme d'automne</i> (2009) de Pierre Loti: identité, tradition, modernité	French
6th November 2011	Kenji Yamazaki	Hosei University-the Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute (Japan)	What is Japanese about Noh?	Japanese
	Osaka Naoki	Meiji University (Japan)	A femme qui se sacrifie - Réinterprétation d'un thème antique au tournant du siècle	Japanese
	Masatoshi Sogawa	Hosei University (Japan)	The Foreigner as an Oddity	Japanese
	Closure and Closing Ceremony			

今回の18人による報告の概要は以下の通りである。

- (1) 日本人個々の「自己アイデンティティ」が〈自己主張〉という形ではなく〈自分探し〉に、しかも過去を深く掘り起こすことでの〈自分探し〉に向かっている様子を、マンガやアニメにも言及しながら検討したウルリッヒ・ハインツェの「アイデンティティを掘り出す—現代日本における過去のシンボル」。
- (2) 明治初頭に「軍国日本の象徴」として喧伝されたものの、第二次世界大戦後はタブー視される

- ことになる神宮皇后と三韓征伐の神話を通して、日本という国の自己表象の変遷を辿ったギョーム・カレの「神功皇后神話盛衰記—ある『日本国家のイメージ』の運命」
- (3) 記紀神話、それ自身当初作られたテキストとして神話でも何でもなかったものが、国学の文献学的精査を受けて建国の「神話」として確固たる存在を得、それがさらに再解釈されて国家アイデンティティを支えるイデオロギーへと化していく過程を検討したアラン・ロシェの「神話とイデオロギー—誤解の系譜」

- (4) 菅原道真の和歌と漢詩を対比させ、和歌の場合には中国的な知識と教養がなお姿を現しているものの、日本的な心性からの風物や事柄の描写が散りばめられていて、和魂漢才といった様相を呈していることを明らかにし、和歌創作における菅原道真の日本的要素と中国的要素のせめぎ合いを明らかにしたロバート・ボーゲンの「道真の和歌—その紛らわしさ」
- (5) 「維新の最大の功労者」であるとともに「最後の武士」でもある西郷隆盛を対象に、一時は「明治政府の敵」であった西郷が、やがては「敬天愛人」の英雄に祭り上げられていくその過程で、絵画や銅像などでの彼の描かれ方がどのように変遷していったかを検討したクリスティアーヌ・セギーの「矛盾的英雄の象徴として西郷隆盛の肖像」
- (6) 日本文化における自死のあり方を検討し、「死の方法」と階層とが結び付けられていることを明らかにするとともに、日本独特の現象とされる切腹、殉死、相愛男女の心中について、それらがどのような諸要素の結びつきの結果であるかを明らかにした川田順造の「日本人の自死に見る道徳観と美意識—切腹、殉死、心中死」
- (7) 自殺率を対象とし、2000年代に入ってから自殺率が増加している日本と、日本よりも経済的・社会的に状況の悪い国における自殺率が日本よりも相対的に低いことを定量的に分析し、「経済的・社会的な状況の悪化が日本の自殺率の高さの原因」という通説的な見方の問題点を明らかにしたマヤ・ミルシンスキーの「自死—日本とスロベニアの比較文化論」
- (8) 日本民族、日本文化の定義づけとしての稲作文化に注目し、民俗学ないし民族学における「日本の稲作文化」の議論の展開と特徴を総説的に概観したヨーゼフ・クライナーの「日本民族・文化の定義づけとしての稲作文化」
- (9) 沖縄・八重山地方において、法要の際に供される伝統的な料理である霊供盆を対象に、その特徴や時代の変化に伴う霊供盆に対する人々の態度の変化などを通して、八重山地方における「祈りの性質の変化」を明らかにした内原英聡の「象徴としてのリョングブン（霊供盆）—八重山の人々の信仰と世界観」
- (10) 「沖縄学の祖」とされる伊波普猷の議論を通して、日本本土との関係において、琉球・沖縄の人々が自らをどのように位置づけ、どのように理解していたかを、同一性、多様性、差異性といった概念から検討した合田正人の「〈沖縄学の祖〉伊波普猷と明治期の人文学」
- (11) 「江戸時代におけるIDカード」であり、太平洋戦争中には内地の世帯の96%が所有したともされる伊勢大麻を対象に、日常的で素朴な信仰のあり方が「日本人らしさ」あるいは「日本人であること」と密接に結びついていることを明らかにしたジョセフ・キブルツの「国民のあかし「伊勢大麻」」
- (12) 太平洋戦争後、人間宣言や新憲法の施行によってそれまでの現人神から「国民統合の象徴」と

なった天皇に関する和辻哲郎と津田左右吉の議論を通し、大正デモクラシーに淵源する国民主義的な天皇不親政論がどのように戦後まで引き継がれたかを明らかにした星野勉の「国民統合の〈象徴〉としての天皇とは？」

- (13) 戦前期の日本において、政党政治の排除や軍部の政治介入の根拠とされた国体の概念について、明治維新の精神を「万機公論に決すべし」という五箇条の誓文に求め、「日本の国体は一党独裁ではなく民主政治にある」とした石橋湛山の主張を検討した鈴木裕輔の「国体は自由主義の原理である—戦前期における石橋湛山の議論を中心に」
- (14) 徴兵制度によって成り立つことになった明治新政府の軍隊に「天皇の軍隊」という特別な地位を与えることになった「軍人勅諭」を起草した西周の案文と、最終的に公布された「軍人勅諭」とを対比させ、西の啓蒙的、功利的な天皇観が権威主義的、国粹主義的な内容に変質したことを明らかにした安孫子信の「『軍人勅諭』と西周」
- (15) 衣装を国民的象徴の要素と捉え、19世紀に執筆された、ギリシアと日本を描いた二つの旅行文学の作品を対象として分析を試みたマリア・エウヘニア・デ・ラ・ニューエスの「アイデンティティ、伝統、現代性：エドモンド・アブーの *La Grèce contemporaine* (1854) とピエール・ロチの *Japoneries d'automne* (1889) におけるフスタネラと着物の研究」
- (16) 「日本を代表する」という言葉が冠せられる能楽の何が日本的であるか、いつ頃から幽玄性や象徴性を追求するようになったのかという点を、世阿弥の時代からの各種の文献に基づいて実証的に検討した山中玲子の「能の何が日本的なのか」
- (17) 自死の伝承としての「処女塚伝説」の観点から森鴎外の戯曲『生田川』と夏目漱石の小説『草枕』を分析し、両者が「処女塚伝説」を作品に取り込むことで「利己心を超える他者への想像力」という新しい創造を試みたことを明らかにした大石直記の「〈身を投げる女〉の表象—〈世紀転換期〉における再生する古伝承—」
- (18) 1960年代に流行した「変な外人」という表現を手掛かりに、外国人に対する日本人の意識の変化と、そのような変化をもたらした背景を大衆文化の側面から検討した相良匡俊の「〈変な外人〉>考」

以上のような議論を受け、シンポジウム最終日には総括討議が行われ、さまざまな観点と主張を突き合わせる作業が行われた。

2 シンポジウムの成果と意義

シンポジウムでは日本研究の第一線で活躍する内外の研究者たちが発表を行い、率直な意見交換を行った。国際的かつ学際的という国際日本学のそもそもの枠組みに加えて、今回は〈象徴〉を手掛かりに置いたことで、アイデンティティの問題が、文学、思想や芸術、歴史、政治といったコアな文化や社会現象においては

国際シンポジウム報告

かりでなく、大衆文化や日常生活においてまで、幅広い範囲で論じられることになった。これは問題の検討にきわめて有益であった。すなわち、日本および日本文化のアイデンティティは、こうして多様な現象を通じて追及されて、単純で純粋なものとしてではなく、多様で複雑なものとして、つまりは動的で多彩なものとして現れ出ることになったのである。今回のシンポジウムの諸発表から言うべきことはしたがって、日本において、アイデンティティは本来在るものというよりむしろ作られてきたものであり、しかもその形成は、内側から一途ではなく、そのつど外的状況に応じて相対的に（悪く言えば、アド・ホックに）なされてきたということである。だから、その現れは、多様で多彩なのである。その形成の実態をさらに精査して、今日、日本のアイデンティティを改めて語るに際して役

立てうるものを探っていくことが、今後の研究の課題となっていくであろう。

以上の学術的成果に加えて、今回のシンポジウムでは、教育面での成果もあった。すなわち、3日間の会期中、ストラスブール大学の日本学専攻大学院生が連日聴講参加してくれたのである。大学院のこの時点で日本研究の国際的展開の実際に触れるということは、勉学研究への意欲増進にきわめて有用なことであろう。こうして、教育ということでも、アルザスでのシンポジウムが機能し始めたことは、本シンポジウムの社会的貢献ということでも喜ばしいことなのである。

【記事執筆：

安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）、
鈴村 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



主な参加者による集合写真



会場の様子



クリスティアーヌ・セギー 教授（ストラスブール大学）



ジョセフ・キブルツ 教授（フランス国立科学研究センター）

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’:
into the Future”

International Symposium

«‘Symbols’ of Japanese Identity»

Date: Friday, 4 November – Sunday, 6 November 2011
Sponsors: Hosei University Research Center for
International Japanese Studies: HIJAS, Centre de
Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale,
Centre National de la recherche Scientifique,
Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace:
CEEJA
Venue: Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace

The International Japanese Studies Symposium held
at CEEJA each year receives presentations on a shared
theme. The theme this year was «‘Symbols’ of Japanese
Identity». Japanese people have used symbols to express
Japanese and Japanese cultural identity, and as a result
there are various symbols that have come to express
Japanese and Japanese cultural identity. We considered
these ‘symbols’ in examining ways in which Japanese and

Japanese cultural identity exists – if we could say such a
thing exists – upon the background of Japanese history,
culture and society.

During the symposium 18 researchers gave
presentations – 10 from Japan and 8 from Europe – that
were wide-ranging even within the specialist fields of
social science, theology, literature, philosophy and cultural
anthropology. The ‘symbols’ included the various forms of
the emperor and emperor system beginning from *Nihongi*
and *Nihonshoki* myths, view of life and death in seppuku
and suicide etc., cultural activity in Waka and Noh etc.,
rice planting and talismans, clothing and other aspects of
everyday life. Results indicated that Japanese and Japanese
cultural identity is far from simple and straightforward,
and is itself diverse and complicated. We suggested that it
was something fluid and multi-faceted.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies;
Professor, Faculty of Letters); SUZUMURA Yusuke
(Visiting Academic Researcher, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④<日本意识>
三角测量——面向未来

国际研讨会

日本国家认同的“象征”

时 间：2011年11月4日（星期五）- 11月6日（星期日）
主 办：法政大学国际日本学研究所（Hosei
University Research Center for
International Japanese Studies: HIJAS）、
法国国立科学中心东亚文明研究所（Centre
de Recherche sur les Civilisations de
l'Asie Orientale, Centre National de
la recherche Scientifique）、斯特拉斯堡
大学人文科学专业日本学科、阿尔萨斯欧洲
日本学研究所（Centre Européen d'Etudes
Japonaises d'Alsace: CEEJA）
会 场：阿尔萨斯欧洲日本学研究所（CEEJA）

CEEJA每年都会选取同一主题举办国际日本学研讨

会，本年度议题为“日本国家认同的‘象征’”。通过对被
日本人视为代表日本及日本文化、或客观结果成为日本及
日本文化认同的各种“象征物”进行研究，解析日本、日
本文化“价值认同”存在与否，内容为何物等问题，进而
对其产生的历史、文化社会背景展开讨论。

本届讨论会有包括10名日本和8名欧洲各国的共18位学
者发表了学术报告，内容囊括社会学、宗教学、文学、哲
学以及文化人类学等各个门类。被提出的“象征”内容也
保罗万象，从日本神话记载；天皇、天皇制；切腹及自杀
等体现出的生死观和歌、能乐等文化活动及稻耕、礼乐、
服饰等生活现象。研讨的结果证明，日本及日本文化的“价
值认同”绝非单纯的概念，其自身有着复杂、多样的特点，
动态而多彩。

【执笔者：

安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授）、
铃村 裕辅（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구④ <일본의식>의 삼각
측량-미래를 향해

국제심포지엄

일본의 아이덴티티를 ‘상징’ 하는 것

일 시：2011년 11월 4일(금)～11월 6일(일)
공동 개최：호세이대학 국제일본학연구소(Hosei
University Research Center for
International Japanese Studies: HIJAS), 프
랑스 국립과학센터 동아시아 문명 연구소
(Centre de Recherche sur les Civilisations
de l'Asie Orientale, Centre National de la
recherche Scientifique), 스트라스부르 마
르크 블로흐 대학 인문과학부 일본학과, 알
자스 유럽 일본학연구소(Centre Européen
d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)
장 소：알자스 유럽 일본학연구소(CEEJA)

CEEJA의 국제일본학 심포지엄에서는 매년 통일된
주제를 준비해 보고하고 있다.

이번 심포지엄에서는 ‘일본의 아이덴티티를 상징하
는 것’을 주제로 일본인이 일본과 일본문화의 아이덴티

티를 표현하기 위해 사용해 온, 또는 결과적으로 일본
과 일본문화의 아이덴티티의 표현이라고 간주해 온 여
러 가지 ‘상징’을 통해, 일본과 일본문화의 아이덴티티
가 과연 존재한다고 할 수 있는지, 존재한다고 하면 어
떤 것인지에 대해 일본의 역사, 문화, 사회를 배경으로
검토했다.

심포지엄에는 일본에서 10명, 유럽에서 8명, 총 18명
의 연구자가 참가해 사회학, 종교학, 문학, 철학, 문화인
류학 및 전문영역에서도 다양한 보고가 있었다. ‘상징’
으로 다루어진 것도 기기(記紀)신화에서 시작하는 천
황·천황제의 여러 모습, 할복과 자살 등으로 본 생사관,
와카(和歌)와 노(能) 등의 문화활동, 벼농사와 화폐, 의
상 등의 생활 현상으로 다양했다.

결과로 일본 및 일본 문화의 아이덴티티는 결코 단순
하고 순수한 것이 아닌 그 자체가 복잡 다양한 것으로,
즉 동적이며 다채로운 것이라고 제시됐다.

【기사집필：아비코 신

(安孙子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수),
스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

戦略的研究基盤形成支援事業

アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

2011 年大連民族学院／法政大学シンポジウム

参照枠としての中国と〈日本意識〉

● 日 時：2011 年 12 月 16 日（金）～17 日（土）

● 会 場：大連民族学院国際言語文化研究センター

● 共 催：大連民族学院国際言語文化研究センター／法政大学国際日本学研究所

法政大学国際日本学研究所（HIJAS）と大連民族学院国際言語文化研究センターとが共催する合同シンポジウムが、2010 年の法政大学での第一回目に続いて、2011 年 12 月に大連民族学院で 2 日間にわたって開催された。現在 HIJAS が研究の中心テーマとしている「〈日本意識〉の再検討」にもつながるものとして、今回は「参照枠としての中国と〈日本意識〉」が全体テーマとして取り上げられた。日本人また中国人が日本を日本として意識する際に、中国を参照枠として用いて「中国と比べて日本は」といった仕方で行うことが、古代から繰り返されてきたのである。その諸事例が、法政側 7 名、大連側 6 名、合計 13 名の発表者たちから、時代と領域とをさまざまに横切って紹介されていった。

まず、古代日本の律令体制を取り上げた発表が 3 つあった。小口雅史（HIJAS）は、中国からの移入で成立した古代日本の律令体制が、その律令で中国をどう処遇しようとしたのかを紹介した（「古代東アジア世界のなかの日本の自国認識」）。井上亘（北京大学）は同じ時代に中国がその律令国家日本を実際にはどう見ていたかについて、そう高く評価していなかったのではないかという視点から発表を行った（「唐からみた古代日本」）。さらに星野勉（HIJAS）は律令国家日本が有した日本的特質を、和辻哲郎や津田左右吉の仕事に依りつつ紹介した（「思想史から見た和漢律令制の構造差」）。

次に、思想史の事例から論じた発表が 4 つあった。何長文（大連民族学院）は儒教の日本移入が儒教の哲学的部分を抜き取ったもので、それが日本人の精神構造そのものの反映であることを主張した（「日本における儒教文化の吸収と見失」）。秦頴（大連民族学院）は二宮尊徳思想の戦中中国への移入の問題に触れつつ、それが現在新たな意味を中国でも持ち得ることを主張した（「中国としての二宮尊徳研究の必要性和方法」）。劉俊民（大連民族学院）は「東洋のルソー」とも呼ばれる中江兆民が西洋的である以上に「文人志士」的な中国的思想家であったことを示した（「東洋の伝統から見た兆民の政治意識と行動」）。安孫子信（HIJAS）は明治啓蒙思想の雄で西洋哲学の日本への導入者であった西周が、儒教そして中国へも丁寧な目配りを行っていたことを主張した（「明治啓蒙思想家にとっての中国」）。

文学からの事例を扱った発表が 2 編あった。王秀文は日本おとぎ話を代表する「桃太郎」の構造分析を行い、とくにモチーフである「桃」と中国文化との関連性を明らかにした（「『桃太郎』の構造」）。小林ふみ子（HIJAS）は江戸時代の「狂詩」作家たちの江戸を謡う

イマジネーションの中で、長安や洛陽のイメージがどのように使われていたのかを紹介した（「狂詩の描く「やつし長安」としての江戸」）。

最後に教育での日中文化の接触を題材として論じた発表が 4 つあった。王敏（HIJAS）は清朝末の中国からとくに法政大学への留学生が、その後の辛亥革命で大きな役割を果たしたことを紹介した（「清国留学生の受け入れ事情をめぐる一考察」）。劉振生（大連民族学院）は「満州国」の時代的産物である「留学生予備校」でかつて学んだ学生たちへ聞き取り調査を行い、政治の教育への複雑な作用を明らかにした（「口述史学による「満州国」留学生予備校への一考察」）。相良匡俊（HIJAS）は日本における音楽・体育教育の草分け的存在であった伊澤修二が同時に、当時の「植民地教育」においても同化主義で独特の役割を果たしたことを紹介した（「植民地教育創始者としての伊澤修二」）。王曉慧（大連民族学院）は法制教育での日中のつながりを古代の律令時代まで遡り論じて、現在それが停滞している理由を指摘した（「日本法制の中国における影響の式微」）。

以上の多様な発表を通じて、〈日本意識〉の成立に、中国が大きくかつ絶対的な役割をはたして来たことが明らかにされた。今回のシンポジウムから改めてわれわれが知るのこうして、今日、〈日本意識〉の新たな生産的な在り様を模索するとき、「参照枠としての中国」がやはりそこに動かしがたいものとしてあって、われわれはまずその中国との関係で、新たに明確な位置取りを模索していかなければならないということである。

【記事執筆：安孫子 信】

（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）



開会の挨拶（安孫子信所長・教授）

*プログラム

< 12月16日（金）>

9:00 開会挨拶

司会：王秀文（大連民族学院教授・国際言語文化研究センター長）

段曉東（大連民族学院副学長）

安孫子信（法政大学文学部教授・国際日本学研究所所長）

9:30 小口雅史（法政大学文学部教授）

古代東アジア世界のなかの日本の自国認識—大唐帝国は「隣国」か「蕃国」か—

10:15 何長文（大連民族学院教授・科研処副処長・文法学院副院長）

日本における儒教文化の吸収と見失

11:00 井上亘（北京大学歴史学系教授）

唐からみた古代日本（唐人所見の古代日本）

13:00 王秀文（大連民族学院教授・国際言語文化研究センター長）

『桃太郎』の構造と中国文化との関わり

13:45 星野勉（法政大学文学部教授・国際日本学研究所前所長）

思想史から見た和漢律令制の構造差

14:30 秦穎（大連民族学院副教授・国際言語文化研究センター二宮尊徳研究所長）

中国としての二宮尊徳研究の必要性和方法

15:30 小林ふみ子（法政大学文学部准教授）

狂詩の描く「やつし長安」としての江戸

16:15 劉俊民（大連民族学院副教授・外国言語文化学院副院長）

東洋の伝統から見た中江兆民の政治意識と行動

17:00 安孫子信（法政大学文学部教授・国際日本学研究所所長）

明治啓蒙思想家にとっての中国

17:45 全体討議

< 12月17日（土）>

9:00 王敏（法政大学国際日本学研究所教授・専任所員）

清国留学生の受け入れ事情をめぐって一考察

9:45 劉振生（大連民族学院教授・国際言語文化研究センター日本研究所長）

口述史学による「満州国」留学生予備校への一考察

10:30 相良匡俊（法政大学社会学部教授）

植民地教育創始者としての伊澤修二

11:15 王曉慧（大連民族学院副教授・文法学院副院長）

日本法の中国社会に対する影響力の衰えについて

12:00 全体討議

18:00 閉会挨拶

星野勉（法政大学文学部教授・国際日本学研究所前所長）

何長文（大連民族学院教授・科研処副処長・文法学院副院長）



開会の挨拶（王秀文センター長・教授〔大連民族学院〕）



星野 勉 教授

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia »
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”

2011 Symposium of Dalian Nationalities University / Hosei University

«China as Framework for Reference and ‘Japan-consciousness’ »

Date: Friday, 16 – Saturday, 17 December 2011
Venue: Dalian Nationalities University International Language and Culture Research Center
Sponsors: Dalian Nationalities University International Language and Culture Research Center / Hosei University Research Center for International Japanese Studies

The second joint symposium of the Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS) and Dalian Nationalities University International Language and Culture Research Center was held at

Dalian Nationalities University over 2 days in December 2011. This was in continuation from the first held in 2010 at Hosei University. The overall theme raised on this occasion was “China as Framework for Reference and ‘Japan-consciousness’ ”, that ties in with the present central theme of research at HIJAS. The method used by Japanese and Chinese people to perceive Japan as Japan, of “Compared with China, Japan is...” has been repeated over and over again since ancient times.

The varied and dynamic 13 presentations by 7 speakers from Hosei, and 6 from Dalian, showed that China has had a great and unequivocal role in the establishment of ‘Japan-consciousness’. We discovered that when we seek new and productive forms of ‘Japan-consciousness’ we find “China as a framework for reference” as an immovable force, and that above all we must search for new and clear positions in our relationship with China.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

战略研究基础形成支援项目
研究方法③ “‘日本意识’의 现状——以东亚为中心”
研究方法④ “‘日本意识’의 三角测量——面向未来”

2011년 대련민족학원, 법政大學 국제研討會

作为参照系的中国与“日本意识”学会报告

日 期: 2011년 12월 16일(星期五)至17일(星期六)
会 场: 大連民族學院國際語言文化研究中心
共同主办: 大連民族學院國際語言文化研究中心、法政大學國際日本學研究所

在学术交流领域内处于合作关系的法政大學國際日本學研究所(HIJAS)和大連民族學院國際語言文化研究中心共同主办了第二次聯合研討會。首次會議于2010年在位于日本東京的法政大學內舉辦，而2011年12月召開、为期两天的第二次會議會場選在了大連民族學院。此次研討

會的主題為“作为参照系的中国与“日本意识””。这一命题与HIJAS正在展开的主要研究课题——重新认识“日本意识”有着诸多共通之处。自古而来，日本人和中国人在观察“日本”这一存在时往往会将中国作为对比轴，即在“与中国相比”这一前提下讨论日本问题。

围绕该主题，法政大學7位、大連方面6位，共13位教授作了各具特色的精彩论述。通过这些报告，在“日本意识”成立的历史过程中、中国始终发挥着不可忽视的巨大作用这一结论得到再次确认。基于这一认识我们意识到，“日本意识”不断变化和显示出新样式的当今，作为“参照系的中国”也仍旧处于不可动摇的位置。也因此，通过探讨与中国的关系重新摸索和明确日本的位置显得至关重要。

【执笔者: 安孙子 信

(法政大學國際日本學研究所所長・文學部教授)】

전략적 연구기반 조성 지원사업
연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로
연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

2011년 다롄민족학원, 호세이대학 합동심포지엄 개최 보고

참조틀로서의 중국과 ‘일본의식’

일 시: 2011년 12월 16일(금)~17일(토)
장 소: 다롄민족학원 국제언어문화연구센터
공동주최: 다롄민족학원 국제언어문화연구센터, 호세이대학 국제일본학연구소

호세이대학 국제일본학연구소(HIJAS)와 연구협력관계인 다롄민족학원 국제언어문화연구센터가 공동으로 주최한 제2회 합동심포지엄이 2011년 12월 다롄민족학원에서 이틀간에 걸쳐 개최됐다. 이는 제1회 심포지엄이 2010년 호세이대학에서 열린 데 이어 두 번째다.

이번 심포지엄에서는 현재 HIJAS의 중심 연구테마인

‘일본의식’의 재검토와도 연관된 [참조틀로서의 중국과 ‘일본의식’]을 전체 테마로 다뤘다. 일본인 또는 중국인이 일본을 일본으로 인식할 때, 중국을 기준으로 ‘중국과 비교해 일본은’이라는 사고방식을 취해 왔고 이러한 방법은 고대부터 있어왔다.

호세이대학에서 7명, 다롄민족학원에서 6명, 총 13명의 다양한 발표를 통해 ‘일본의식’의 성립에 중국이 크고 절대적인 역할을 해왔다는 것이 밝혀졌다.

우리는 이러한 연구를 통해 오늘날의 새롭고 생산적인 ‘일본의식’을 모색하는 데 있어서 ‘참조틀로서의 중국’은 역시 확고부동한 존재이며, 먼저 중국과의 관계에서 새롭고 명확한 토대를 구축해야 한다는 것을 알 수 있다.

【기사집필: 아비코 신

(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)】

第6回研究会

映画の中の日本

- 報告者：マートライ・ティタニラ（早稲田大学演劇博物館研究員）
- 日 時：2011年10月15日（土）14時00分～17時30分
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 富士見校舎1階 遠隔講義室
- 司 会：鈴木 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）

去る10月15日（土）、法政大学富士見校舎1階遠隔講義室において、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」の第6回研究会が開催された。今回は、早稲田大学演劇博物館研究員のマートライ・ティタニラ氏を迎え、「映画の中の日本」と題し、映画上映、講演と質疑応答の2部に分けて行われた。

まず、映画上映では、新藤兼人の監督作品『藪の中の黒猫』（1968年）が上映された。『藪の中の黒猫』のあらすじは次のとおりである。

平安時代中頃、都では武士が何者かに惨殺される事件が起きていた。武勇を兼ね備えた侍である藪の銀時（中村吉右衛門）は、主人の源頼光（佐藤慶）の命により、犯人を捕らえようとする。竹藪の中の屋敷に辿りついた銀時が目にしたのは、3年前に別れたまま行方分らなかった母ヨネ（乙羽信子）と妻シゲ（太地喜和子）であった。実は、二人は3年前に落ち武者の襲撃にあって落命したのだが、天地の魔人に願を掛けて黒猫の物怪として蘇り、この世の侍の生血をすすり続けていたのであった。しかし、シゲは願を破って侍である銀時の生血をすすらず、銀時との再会から8日後に地獄に落ちた。一方、地獄に落ちるよりも侍の生血を吸うことを選んだヨネは銀時に左腕を切り落とされてしまう。黒猫の物怪を討ち取ったことを評価した頼光は、銀時に7日間の斎戒沐浴を命令する。そして、7日間の物忌みが明けようとする直前、ヨネが再び現れ、激しい戦いの末に切り落とされた左腕を取り戻す。7日間の斎戒沐浴を行うという誓いを果たせなかった銀時は精神に異常を来たして彷徨した後、竹藪の外れにあり、3年前に襲撃を受けた自分の家の焼跡の上で絶命するのであった。

第2部では、上記のような『藪の中の黒猫』について、映画と演劇、『藪の中の黒猫』における文学的・演劇的・映画的な要素の受容、新藤兼人の独自性といった点について分析が行われ、以下の点が明らかにされた。

まず、『藪の中の黒猫』における文学的な要素の受容としては、『今昔物語』（羅城門が舞台となる）、『平家物語』『剣巻』（渡辺綱が鬼の腕を切る）、『太平記』（頼光が牛鬼の頸を切り落とす）、『御伽草子』（渡辺綱に腕を切り落とされた鬼が腕を取り返す）、『大江山絵詞』（頼光が大江山の酒呑童子を退治する）といった文学作品ばかりでなく、羅生門の鬼と渡辺綱の戦いを描く能〈羅生門〉や、〈羅生門〉の後日譚であり、茨木童子という鬼が渡辺綱に切り落とされた腕を取り戻す筋立ての歌舞伎『茨木』などの内容も広く取り入れ

られていることが示された。

演劇的な要素の受容としては、主演の中村吉右衛門が歌舞伎俳優、ミカド役の観世栄夫が能役者である、といった表面的な要素以外にも、新藤兼人が積極的に演劇的な手法を採用していることが確認された。例えば、照明に関しては、スポットライトの使用により対象を際立たせる手法や、照明の明暗により場面の転換を示すといった、舞台における照明の利用法が積極的に用いられていることが指摘された。また、侍の生血を吸うための場所としてヨネとシゲとが作りだした屋敷の造りが能舞台と同じ構造であること、また、屋敷へと向かう道や、屋敷の中で寝所へと続く廊下も、能舞台における橋掛りと同じ機能を持つことが示された。この他、ヨネが黒猫の物怪の正体を見せる場面で歌舞伎の般若隈が用いられたり、宙乗りや宙返りといった軽業が用いられることなども、歌舞伎の技法が応用されている代表的な事例といえることが示された。

そして、映画的な要素の受容としては、『藪の中の黒猫』が、『怪猫岡崎騒動』（1954年）や『秘録怪猫伝』（1969年）といった、歌舞伎や古典文学に由来する「化け猫映画」の系列に連なることが確認された。

一方、このような様々な分野の要素の受容を踏まえた上で、新藤兼人の独自性が何に求められるか、という点については、以下のような指摘があった。まず、映画の題名は、話の舞台に焦点を当てれば『羅生門』であり、鬼が腕を取り戻すという結末を重視すれば『茨木』となるのが当然である。しかし、『羅生門』では1950年の黒澤明の映画と同じになるし、『茨木』では作中に茨木童子が出てこないため適切ではない。そこで、新藤は「ミステリアスな様子」や「黒猫の怪奇さ」を暗示する「藪の中」という言葉を選んだと思われる。しかも、「藪の中」という言葉によって、映画の観客は芥川龍之介の短編小説『藪の中』から黒澤の映画『羅生門』が生れたという経緯を連想することが可能である。従って、新藤は言外に「藪の中」という言葉が映画の分野で持つ意味を巧みに利用したと言える。

また、源頼光の四天王である坂田金時を模倣する形で銀時という主人公を造形したことや、銀時の「頼光の命令に従えば母と妻を殺し、従わなければ自分が殺される」という立場とヨネとシゲの「侍の生血を吸わなければ地獄に落ちるが、地獄に落ちないためには侍である息子や夫の生血を吸わなければならない」という状況は、古典文学や「化け猫映画」に義理と人情の葛藤という問題を加味し、『藪の中の黒猫』に新しい魅力を与えることになった、と指摘された。

今回の講演によって、『藪の中の黒猫』という映画が、古典文学、演劇、あるいは映画から様々な要素を幅広く摂取しており、そこに新藤兼人の独自性が加え

られることで成り立っていることが明らかにされた。マートライ氏の取り組みは、「日本的な題材を映画化した」という誰にでも容易に分かる表面の下に、重層的で多様な要素が織り込まれているということを実証的に示すものであった。このような手法は、過去の映画ばかりでなく、「題材や表現が日本的」とされる現在の映画の分析に応用することで、映画という映像芸

術を通した日本意識の解明にも寄与するものと思われる。その意味において、マートライ氏の講演は、示唆に富む内容であったと言えるであろう。

【記事執筆：鈴村 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’:
from Ancient to Early Modern Eras”

6th Research Meeting “Japan in Films”

Presenter: Titanilla MÁTRAJ (Researcher, Tsubouchi
Memorial Theatre Museum, Waseda
University)

Date: Saturday, 15 October 2011, 14:00-17:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Fujimi
Building 1F Remote Conferencing Room

Chair: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic
Researcher, Hosei University Research Center
for International Japanese Studies)

On this occasion we welcomed Dr. Titanilla MÁTRAJ, researcher at the Tsubouchi Memorial Theatre Museum, Waseda University, who divided the time into 2 parts: film screening, and then a lecture with questions and answers on the theme of “Japan in Films”.

First of all, *Yabu no Naka no Kuroneko* (Black Cat, 1968), directed by Shindo Kaneto, was screened. This was followed by an analysis of the literary, dramatic and cinematic elements present in the film and the play, *Yabu no Naka no Kuroneko*, and of the uniqueness of Shindo Kaneto.

This lecture showed us that the film, *Yabu no Naka no Kuroneko*, was created by reaching widely into various elements from ancient literature, drama, and cinema, with the addition of Shindo Kaneto's own peculiarities. Dr. Mátrai used the method of examining modern cinema with so-called “Japanese theme and expression” – not just old cinema – in order to contribute to the understanding of Japan-consciousness present in the moving image art form of cinema. In this respect the lecture provided many hints and suggestions.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic
Researcher, Hosei University Research Center for
International Japanese Studies)

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法① “‘対日認識’
の变迁——从古代到现代”

第6次研究会

映画中的日本

報告人: Mátrai Titanilla (早稲田大学演劇博物館
研究員)

時 間: 2011年10月15日(星期六) 14:00-17:30

会 場: 法政大学市谷校区 富士見校舎1層 遠隔讲义
室

主 持: 鈴村 裕輔 (法政大学国際日本学研究所客員
学術研究員)

这次我们邀请到了早稲田大学演劇博物館研究員
Mátrai Titanilla先生作了以“映画中的日本”为题的报
告。该报告分为电影鉴赏、讲解和回答提问2部分。

电影鉴赏时间内选播了新藤兼人导演的作品《薮之中
之黑猫》(1968年)。其后, Mátrai Titanilla先生对该
片的文学、演艺、电影等各个要素, 以及新藤兼人导演
的独创性做了分析。

讲座中指出, 《薮之中之黑猫》这部电影融合了古典
文学、演剧、电影等多种元素, 同时加入了新藤兼人独
创性而成立。Mátrai先生的分析手法不仅适用于到以往的
电影, 对于“题材和表现具有日本特色”的当代电影也同
样适合, 对于通过用电影这种映像艺术解析日本意识具
有非常重要的作用。从这个意义上说, 这次讲座包含的作
用和内容深远。

【执笔者: 鈴村 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구① <일본의식>의 변천
—고대에서 근대로

제6회 연구회

영화 속의 일본

보고자: 마트라이 티타나라(와세다(早稲田)대학 연극
박물관 연구원)

일 시: 2011년 10월 15일(토) 14:00 ~ 17:30

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 후지미 교사 1층
원격강의실

사 회: 스즈무라 유스케(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제
일본학연구소 객원 학술연구원)

이번 연구회는 와세다대학 연극박물관 연구원인 마트
라이 티타나라 씨를 맞이하여 ‘영화 속의 일본’이라는 제
목으로 영화상영 및 강연, 질의응답 등 2부로 나뉘어 진
행됐다.

먼저 신도 가네토(新藤兼人) 감독의 작품 ‘덤불 속의
검은 고양이(1968년)’가 상영됐다. 다음으로 영화와 연
극 ‘덤불 속의 검은 고양이’에 대한 문학적, 연극적, 영화
적 요소의 수용, 신도 가네토의 독자성에 대한 분석이 이
루어졌다.

이번 강연을 통해 영화 ‘덤불 속의 검은 고양이’가 고
전문학, 연극 또는 영화에서 다양한 요소를 폭넓게 수용
했고 거기에 신도 가네토의 독자성이 더해져 제작됐다는
것을 알 수 있었다. 마트라이 씨의 연구방법은 과거의 영
화만이 아닌 ‘소재와 표현이 일본스럽다’는 현재의 영화
분석에 응용함으로써 영화라는 영상예술을 통해 <일본
의식>을 풀어아가는 데도 기여할 것으로 보인다. 이런 의
미에서 이번 강연은 시사하는 바가 큰 강연이었다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

第7回研究会

「日本」と「義理」

- 報告者：李 知蓮（法政大学国際日本学研究所学術研究員）
- 日 時：2011年12月17日（土）15時30分～17時30分
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

日本における「義理」の研究史は近代以降に始まり、今日に至る。

前近代の「義理」は、詳しく調べたり、深い考察を進めたりして明らかにすべき謎ではなかった。それは「挨拶」や「お世話」のように、人々がともに生き、支えあうところに発生する倫理観念の一つだった。身分社会だっただけに、一種の階層化された観念ではあったが、それを当たり前とする感覚で生きていた人々からすると、改めて解明すべき謎ではなかった。それなのに、近代になってから「義理」が、「研究され」始める。

たくさんのものが近代化の波にさらわれていく中、「義理」は生き残った。大きな戦争を通過した後でもそうだったし、高度経済成長やバブル崩壊の後の経済戦争の時代にも死語とはならず、残っている。「義理」の研究史は既述のように近代化以降の戦前から始まるが、それらの先行研究は果たして、しっかりと時代の流れに追いつき、たくさんの資料によって、生身の人々の生活に密着した視点から実証的に論じられてきたのだろうか。

もちろん多様な解釈があり得る。が、今回の研究会を通じて考えたかったのは、「義理」に関するこれまでの先行研究が設定してきた「日本」という枠のことである。「西洋」の倫理観念と相対するものとしての「日本」と、その対比から生まれてくる「特殊」なものとしての「義理」といった構図は、多くの先行研究において疑われてこなかった。そこには、韓国や中国といった北東アジアの国々の「義理」との国際比較という視点が欠如しているし、研究対象の中心であるはずの「日本人」の定義も抜けていた。「義理」と「日本人」と「特殊」という要素がつくった枠の中で、「地方」と「日本と呼ばれる地に住んでいる生身の人々」の実像が、得体の知れぬ誇りや嫌悪とともに交錯していたように見える。

そういうわけで報告者は、アジアの国々との国際比較、研究対象や資料の実体化といった、既存の研究では十分に考慮されてこなかった要素を補うことを、今

回の研究会での主題に決めた。そのために、韓国語の「ういり（義理）」との意味比較、各種の書籍文献やソーシャルネットワークで実際に語られた「義理」の用例や、アニメーション『サマーウォーズ』にあらわれた「義理」の姿を分析した。その過程で、ルース・ベネディクトの『菊と刀』や新渡戸稲造の『武士道』の背景にある「アメリカ」という要素が浮上したし、それと国家象徴としての「日本」と対比される、地域社会の生身の人々としての「日本人」、それらが混交してきた日本社会のあり方についても様々な観点からの議論ができた。

今回の研究会での報告者の主張の中心には、前近代の政治的支配階層だった武士たちの倫理としての「義理」や、近松や西鶴などによる伝統的な芸術作品にあらわれた、一種のドラマティックな筋合いを裏付ける「義理」のみでは盛りきれない、互いが互いを「保護」するための庶民的倫理意識としての「義理」の存在があった。たとえば「香典返し」はその代表的な例であるし、いわゆる大衆文化で描かれる「義理」の物語にはそのようなモチーフのものも多い。「またたびもの」で有名な長谷川伸の作品もその一つで、彼の作品にあらわれている「義理」の情緒を批評することは決して簡単ではない。

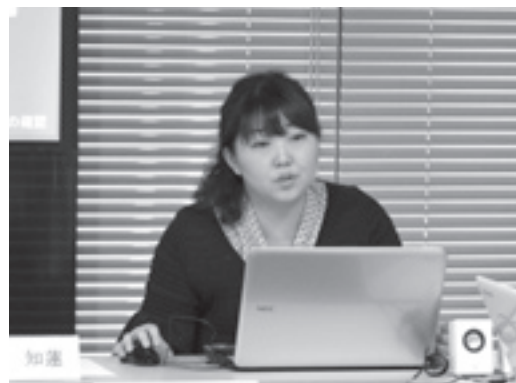
3・11大震災以降は改めてそのような、地域社会を基盤とする普段からの相互協力の重要性が再認識された。

そして長い間、日本人が生きてきた現場、その共同体意識の底辺には「義理」の観念が働いてきたが、以上のような意味でそれは十分には検証されて来なかった。より細分化された、より具体的な実例を根拠にした研究が、まさにこれから必要となろう。今後はその課題に向かって、国際日本学的なアプローチの方法をもって、さらなる研究成果を報告していきたい。

【記事執筆：李 知蓮
（法政大学国際日本学研究所学術研究員）】



司会：田中 優子 教授



李知蓮 氏

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’:
from Ancient to Early Modern Eras”

7th Research Meeting

“Japan” and “Giri”

Presenter: LI Jiyeon (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Date: Saturday, 17 December 2011, 15:30-17:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Yuko TANAKA (Professor, Faculty of Social Science, Hosei University)

“Giri (duty)” in pre-modern society was no “nazo (enigma)”. It was no more than a moral code emerging from the interaction of people, such as “aisatsu (greeting)” or “osewa (hospitality)”. Even so, “giri” has become the subject of post-modern “research”.

Be that as it may, has that research managed to discuss it honestly from a point of view within real people's

lives, and following closely the passing of generations?

My consideration on this occasion was the framework of “Japan” that had been set by that research. I found there were few questions raised concerning “Japan” in relation to the “West”, and the formation of “giri” as a “special” phenomenon. It also skips a definition of “Japanese people”.

My main theme was a comparison between different countries in Asia of the actual elements of research focus, and I analysed the forms of “giri” portrayed in animation, in a comparison with Korean language examples. Through this process, the concept of America stood out as background to *Chrysanthemum and the Sword* and *Bushido*. “Japan” as national symbol also emerged: in contrast is the “Japanese people” as real people living in regional society. I discussed, from a variety of perspectives, Japanese society that is created from the integration of these two elements. I look forward to presenting my future findings.

Report by: LI Jiyeon (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’
的变迁——从古代到现代”

第7次研究会

“日本”和“情义”

报告人：李 知莲（法政大学国际日本学研究所学术
研究员）

时 间：2011年12月17日（星期六）15:30-17:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲义室

主 持：田中 优子（法政大学社会学部教授）

前近代社会中的“情义”并非“不解之谜”。近代以
前“情义”只是“打招呼”、“相互照顾”等人与人之间基
本交流的产物，而近代以后则成为研究对象。其研究成

果伴随着时代的潮流而进步，实证性研究也从与人们生活
密切相关的视点逐步展开。

本次研究会讨论的对象是先行研究中涉及“日本”主
题的内容。“日本”不同于“西洋”，而“日本”框架中出
现的“情义”也带有“特殊性”，这种认识在各众场合下
得到广泛认同。

报告者从与亚洲各国的比较，以及在研究对象、资
料中加入实体化要素的2方面展开论述。尤其是通过与韩
语比较和使用范例分析动画片中描绘的“情义”。同时抽
离出《菊与刀》和《武士道》背景中的“美国”因素，将
其作为国家象征的“日本”相比较，以此讨论地方社会
中作为个体的“日本人”、及日本社会样式特点。其研究
成果在今后也值得继续关注。

【执笔者：李 知莲（法政大学国际日本学研究所学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구① <일본의식>의 변천—
고대에서 근대로

제7회 연구회

‘일본’과 ‘의리’

보고자: 이 지연(李 知蓮, 호세이대학 국제일본학연구
소 학술연구원)

일 시: 2011년 12월 17일(토) 15:30 ~ 17:30

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학 사회학부
교수)

전근대사회에 있어 ‘기리(義理)’는 ‘수수께끼’가 아니
었다. 그것은 ‘인사’나 ‘신세’처럼 사람이 모여 사는 곳
에 생기는 윤리 관념에 불과했다. 그런데 근대 이후에 ‘의
리’가 ‘연구’되기 시작한 것이다. 과연 그 연구들은 실제
로 살아온 사람들의 생활에 밀착한 관점에서 시대의 호
름을 따라 실증적으로 전개되어 왔을까.

이번 연구회를 통해 생각하고 싶었던 것은, 그러한 기
존의 연구들이 설정해 온 ‘일본’이라는 테두리에 대해서
다. ‘서양’과 대비되는 요소로서의 ‘일본’과 거기에서 태
어나는 ‘독특한 것’으로서의 ‘기리’가 이어지는 구도는
많은 경우 의문 없이 전개되었다. 또한 ‘일본인’에 대한
정의도 빠져 있었다.

발표자는 아시아 국가들과의 비교, 연구 대상 및 자료
의 실체화와 같은 요소를 보충하는 것을 주제로 한국어
‘의리’와의 비교, SNS등의 실례, 애니메이션에 그려진 ‘기
리’의 모습을 분석했다. 그 과정에서 <국화와 칼>과 <무
사도>와 관련해 ‘미국’이라는 요소가 등장했고, 그것이
국가 상징으로서의 ‘일본’과 대비되는 지역 사회에 실제
로 살아온 ‘일본 사람’이 어우러져 형성한 일본 사회의
모습에 대해서도 다양한 관점에서 토론할 수 있었다. 이
를 토대로 앞으로도 새로운 성과를 발표해 갈 것이다.

【기사집필: 이 지연

(李 知蓮, 호세이대학 국제일본학연구소 학술연구원)】

特別研究会

日本民俗学・民族学の貢献 ―昭和 20-40 年代まで―

- 報告者：ロナルド・ドーア（ロンドン大学インペリアルカレッジ名誉教授）
- 日 時：2011 年 10 月 21 日（金）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

去る 2011 年 10 月 21 日に法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー室を会場に、ロンドン大学インペリアルカレッジ名誉教授のロナルド・ドーア（Ronald Philip Dore）先生を講師にお招きして特別研究会を開催した。

現在、86 歳のドーア先生は「昭和 20 年代の日本社会調査を振り返って」というテーマで、いきいきした話をして下さった。「私の一生は幸運の連続であった」と先生は何度も繰り返した。まず、高等学校を卒業すると同時に、イギリス外務省にスカウトされて第二次世界大戦に突入する母国のために普段はあまり研究されていないアジアの言語を勉強してもらえないかと依頼されしかし、自らはトルコ語と中国語を志願したが、日本語に振り分けられた。それによりロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）に設けられた日本語学校の特訓コースの第一期生として最優秀の成績で卒業し、最前線に送られることなく恩師のフランク・ダニエルズ（Frank Daniels）教授のもとで講師として大学に残り、後輩を教えることになった。1947 年、ロンドン大学で博士号を取得し、1 年間日本に留学するための奨学金を与えられたが、アメリカの GHQ が日本入国ビザを発行しなかったため、しばらくロンドンに留まってダニエルズ夫人のオトメさんのサロンで、戦後ロンドンに立ち寄ったわずかな日本人と出会うことになった。そのなかでも江上波夫という名前をよく覚えていたという。ようやく 1950 年にイギリス大使館文化部の無給補佐官として東京に赴いた。その時の研究テーマは江戸時代の日本の寺子屋などの教育制度であったが、長い船旅の間に当時ヨーロッパでよく読まれた *Middletown* という社会学的なモノグラフを熟読

し、せっかく日本で勉強できるのだから、図書館ばかりにこもらずに、生きている日本人の社会に溶け込もうとした。そこで、新宿区の「したやま町」に下宿し、都市に住んでいる日本人の生活を研究し、後に *City Life in Japan*（邦題『都市の日本人』）という著作にまとめた。そのとき日本側で交流のあった人物に、丸山眞男、福武直などの先生方がいる。ロンドンに戻った時、Scarborough Report（スカーボロ侯爵リポート）がそれまでにヨーロッパで主流であった文献学を中心とした日本学を厳しく批判しており、ロンドン大学に社会科学系の日本研究の場が設置され、その教員のポジションを得ることになった。イギリス政府や財界は日本で共産主義革命が起こるのではないかと懸念し、様々な研究会が開かれており、再度の幸運で日本の農地改革調査に派遣され、山形県と山梨県をフィールドに研究をした。その成果は後に *Land Reform in Japan*（邦題『日本農地改革』）という本にまとめられた。カナダのプリティシュ・コロンビア大学に招聘され、その頃、「海を渡った日本の村」の調査でカナダに渡ってきた鶴見和子、蒲生正男と出会った。

自身の日本との係わりの回顧の後に行われたディスカッションでは、ドーア先生は柳田国男先生などの日本の民俗学の研究者などについてのご自分の考えをまとめて述べられた。

なお、ドーア先生の講演については、2011 年度内に出版する研究会の報告書に掲載する予定である。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授）】



ロナルド・ドーア 名誉教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-
consciousness’”

Special Research Meeting

“Contribution of Folklore Studies and Ethnology: Showa 20s-40s”

Presenter: Ronald P. Dore (Professor Emeritus of Imperial
College, University of London)

Date: Friday, 21 October 2011

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies; Professor and Special Adviser, Planning
and Strategy Division)

A special research meeting was held on 21 October to
welcome Ronald P. Dore, Professor Emeritus of Imperial
College, University of London. Professor Dore, who is
now in his 86th year, gave an animated talk on the theme
of “Looking Back on my Studies of Japanese Society in
the Showa 20s”. During wartime he graduated from the

School of Oriental and African Studies, University of
London with top results as a member of the inaugural
class of its intensive Japanese course, and remained there
as lecturer. In 1947 he received his doctorate, and in 1950,
studied at the Institute of Social Science, University of
Tokyo. His research theme was the Edo period education
system; he continued, however, his reading of the
monograph *Middletown* applying it to contemporary
Japanese society. He took lodgings in “Shitayama-cho”
in Shinjuku Ward, researching the lives of Japanese city-
dwellers, which concluded in his famous work, *City Life
in Japan*. Academics he knew included Maruyama Masao
and Fukutake Tadashi. After his return, the Scarborough
Report was highly critical of Japanese studies centering on
bibliographical study - the main approach within Europe.
The University of London began social studies-centred
Japanese research under him. He visited Japan again to
research land reform, which resulted in *Land Reform in
Japan*.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies;
Professor and Special Adviser, Planning and Strategy
Division)

战略研究基础形成支援项目 研究方法② “近代‘对日认识’
的形成”

特别研究会

日本民俗学 民族学の贡献 ——昭和 20 至 40 年代

报告人: Ronald Phillip Dore (英国伦敦大学帝国学
院名誉教授)

时 间: 2011年10月21日 (星期五)

会 场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲义室

主 持: Josef Kreiner (法政大学国际日本学研究所
兼任所员、国际战略机构特别教授)

10月21日, 我们邀请 英国伦敦大学帝国学院名誉教
授Ronald Phillip Dore召开了特别研究会。

此次研究会的议题为“回顾昭和20年代日本社会调
查”, 现年86岁的Dore教授作了精彩的报告。Dore教授

第二次世界大战期间以首席成绩毕业于伦敦大学东方与
非洲研究学院SOAS (School of Oriental and African
Studies) 第一届日语学校特训班, 并作为讲师留校。
1947年取得博士学位, 后几经辗转终于1950年留日, 进
入东京大学社会科学研究所。其研究题目为江户时代教
育制度, 但熟读*Middletown*分析报告并深入到日本社
会中, 甚至搬到新宿区旧街市居住以研究都市日本人的
生活实景, 其后基于研究结果撰写了著作《*City Life in
Japan* (都市的日本人)》。著名政治学者丸山真男、福武
直等均与他交往密切。归国后, Dore教授在斯卡伯勒报告
(Scarborough Report) 中对以文献学为主的欧洲主流日
本研究展开了激烈批判、筹划在伦敦大学中设置社会科
学日本研究并担任教员。其后, 受派调查日本农业改革,
并著《*Land Reform in Japan* (日本农地改革)》。

【执笔者: Josef Kreiner

(法政大学国际日本学研究所兼任所员・国际战略机构特别教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구② 근대 <일본의식> 의
성립

특별 연구회

일본 민속학, 민족학의 공헌—쇼와 20~ 40 년대 (1945 ~ 1974) 까지

보고자: 로널드 필립 도어(런던대학 임페리얼 칼리지
 명예교수)

일 시: 2011년 10월 21일(금)

장 소: 호세이대학 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소
겸담 연구소원·국제전략기구 특별교수)

10월 21일, 로널드 필립 도어(런던대학 임페리얼 칼리
지) 명예교수를 초청하여 특별연구회를 개최했다. 올해
86세인 도어 교수는 ‘쇼와 20년(1945~54)대의 일본
사회조사를 뒤돌아보며’ 라는 주제로 생생하게 이야기
해 주셨다.

도어 교수는 태평양전쟁 중 런던대학 동양아프리카학
원 SOAS(School of Oriental and African Studies)

일본어학교 특별훈련코스의 제1기생 출신으로 최우수
성적으로 졸업하고 대학에 강사로 남았다.

1947년에 박사학위를 취득, 1950년에는 동경대학 사
회학연구소에 유학하게 됐다. 연구 테마는 에도(江戸)
시대의 교육제도였지만 <*Middletown*>이라는 모노그래
프에 심취해 살아있는 일본사회에 융화되려고 했다. 이
때 신주쿠(新宿) 시타야마초(したやま町)에서 하숙하면
서 도시에 사는 일본인의 생활을 연구해, <*City Life in
Japan* (도시의 일본인)>이라는 명작을 완성시켰다. 이
시기에 마루야마 마사오(丸山眞男)와 후쿠타케 다다시
(福武直) 등과 교류가 있었다.

귀국 후, 스카브로 후작 리포트(Scarborough
Report)가 당시 유럽에서 주류를 이루었던 문헌학을
중심으로 한 일본학을 신랄하게 비판해 런던대학 사회
과학계 일본연구소가 설치되었고 그곳의 교원이 됐다.
또한, 일본의 농지개혁조사에 파견돼 그 성과를 <*Land
Reform in Japan* (일본농지개혁)>으로 정리했다.

【기사집필: 요셉 클라이너

(호세이대학 국제일본학연구소 겸담 연구소원·국제전략기구특별교수)】

第3回研究会

日本民俗学・民族学の貢献 ―昭和 20-40 年代まで―

● 日 時：2011 年 11 月 18 日（金）～19 日（土）

● 会 場：法政大学九段校舎 3 階 遠隔講義室

● 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

戦略的研究基盤形成支援事業「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討―〈日本意識〉の過去・現在・未来」研究アプローチ②の今年度の第3回の研究会は、去る 11 月 18 日（金）・19 日（土）の二日間にわたって法政大学九段校舎 3 階の遠隔講義室で行われた。

今年のテーマは、主に終戦から昭和 40 年前後の日本の民俗学・民族学の動きが、終戦を迎えるまでは植民地を多数かかえた多民族国家であった日本帝国から、にわかに「単一民族国家」となった日本にどのような影響を与えたかを分析し、討論するものである。

第3回の研究会では、地方レベルでの民俗学研究ないし郷土史研究の動きと、アイヌの研究について取り上げた。

11 月 18 日（金）は、熊本県立大学文学部の大島明秀准教授に「戦後熊本における郷土史編纂活動―『郷土文化研究所』を中心に」というテーマでご報告頂いた。昭和 23 年に熊本県で設立された郷土文化研究所についての、非常に興味深い報告であった。当時の熊本には、いくつかの大学が設立され、県知事、国会議員、マスメディアをはじめとする政財界と学界の名士が 80 名も結集して「熊本人とは何か」を問う学術機関を創る運動を展開していた。これは幅広い企画で、阿蘇、天草、球磨郡などの広い地域の現地調査、また考古学から近世史にわたる幅広い時代を研究の対象とした。近代史が取り上げられていないのがその特色である。この研究所は熊本女子大学を中心に置かれたが、後に熊本県立大学が設立された際には、大学の組織としては設置されなかった。また、この研究所の中心的な人物であった圭室諦成が明治大学に移籍し熊本を去った後は、活動が後退し、この研究所の活動は 3 年間で終わった。しかし、この研究所の活動は、学生

の勉学のレベルでは長く影響を与えた。討論では、熊本の郷土研究とは対照的に、鹿児島では高校の教員を中心とした数々の小さな研究会ができ、今でも活動を続けていることと、反面、熊本の郷土研究は博物館設立にはつながらなかったことなどが指摘された。

11 月 19 日（土）は、北海道大学大学院文学研究科の桑山敬己教授が「日本のアイヌ研究に関する若干の考察」、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治准教授が『『民族学研究』におけるアイヌ研究―終戦から昭和四〇年代まで―』というテーマで、それぞれ膨大な資料を巧みに整理して分析し、戦後のアイヌ研究、特に昭和 30 年代の問題をとりあげた。昭和 24 年から数年間にわたって行われた、日本民族学協会の沙流谷アイヌ総合調査が中心的な話題となった。これらの調査が、岡正雄を通じて諸外国、特にウィーン大学におけるアレクサンダー・スラビック教授のアイヌ研究にどのような影響を及ぼしたのかが検討された。

研究会の最後に設けられた総合討論では、今年度の研究をふまえて来年度の研究テーマについても話し合われた。清水昭俊先生などからの助言で、来年度も戦後から現在に至るまでの日本の民族学と民俗学が「日本意識」に与えた影響を研究対象とすることになった。ただし、昨年度・今年度とは研究会のかたちを変えて、戦後の主だった民族学と民俗学の転換期に活躍した研究者をお招きして話題提供を頂き、それについて討論していくかたちの研究会を設ける方向で検討することとなった。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授）】



クライナー 特別教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-
consciousness’”

3rd Research Meeting

“Contribution of Folklore Studies and Ethnology: Showa 20s-40s”

Date: Friday, 18-Saturday, 19 November 2011
Venue: Hosei University Kudan Building 3F Remote
Conferencing Room
Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies; Professor and Special Adviser, Planning
and Strategy Division)

The 3rd research meeting handled research of folklore
studies on a regional level, and movements in research of
local history, as well as Ainu research.

OSHIMA Akihide, Associate Professor of the
Prefectural University of Kumamoto gave a presentation,
“Historiographical Activities in Local History in Post-
war Kumamoto: Focussing on the ‘Kyodoshi Bunka
Kenkyujo’”. The Cultural Institute of Local History,
founded in Kumamoto in 1948, gathered together 80 names

from the political and scholarly worlds as an academic
body to investigate the question, “What are the people of
Kumamoto?”. However, the central figure, TAMAMURO
Taijo, moved to Meiji University, and withdrew after just
3 years. We learnt during discussion that similar activities
actually continue up to today in small groups - mainly of
senior high school teachers in Kagoshima - and that local
research of Kumamoto had no connection with museum
establishment.

The issue of post-war Ainu research was raised by
KUWAYAMA Takami, Professor of the University of
Hokkaido, in “Some Considerations on Ainu Research in
Japan”, and by YAMASAKI Koji, Associate Professor of
the Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous
Studies, in “Ainu Research in the Journal *Minzokugaku
Kenkyu*: From the Conclusion of the War until 1970”. A
central theme was the research of Ainu of the Sarudani
Valley carried out by the Japanese Society of Ethnology
over many years since 1949.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies;
Professor and Special Adviser, Planning and Strategy
Division)

战略研究基础形成支援项目 研究方法② “近代‘对日认识’
的形成”

第3次研究会

日本民俗学 民族学の貢献 ——昭和 20至40年代

日 期: 2011年11月18日(星期五)、19日(星期六)
会 场: 法政大学九段校舍3层 远隔讲义室
主 持: Josef Kreiner (法政大学国际日本学研究所
兼任所员、国际战略机构特别教授)

第3次研究会的议题围绕日本各地民俗学研究、乡土
史动向以及阿依努研究展开。

熊本县立大学的大岛明秀副教授作了题为“战后熊本
乡土史编纂——以‘乡土文化研究所’为中心”的报告。
熊本县乡土文化研究所系昭和23年由政商学各界80名有识

之士发起、旨在研讨“何为熊本人”而创设的学术机关。
但其中心人物、圭室諦成转至明治大学后短短3年内学术
活动大为倒退。主要研究活动也由以鹿儿岛地区高中教
师为主要成员构成的各小型研究会继承，熊本的乡土研究
因此与博物馆的设立相脱节。

另外，北海道大学的桑山敬己教授作了“关于日本爱
依努民族研究的几点考察”、北海道大学阿依努原住民研
究中心山崎幸治副教授以“杂志《民族学研究》中的阿依
努研究——战后至昭和40年代”为题分别对战后阿依努
研究问题作出了报告。其中，昭和24年起历经数年、由日
本民族学协会沙流谷进行的阿依努综合调查成为报告的
中心内容。

【执笔者: Josef Kreiner

(法政大学国际日本学研究所兼任所员·国际战略机构特别教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구② 근대 <일본의식>의
성립

제3회 연구회

일본 민속학, 민족학의 공헌—쇼와 20~ 40년대(1945~1974)까지

일 시: 2011년 11월 18일(금)~19일(토)
장 소: 호세이대학 구단교사 3층 원격강의실
사 회: 요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소
겸담 연구소원·국제전략기구 특별교수)

제3회 연구회에서는 지방 단위의 민속학 연구 및 향
토사 연구의 움직임과 아이누 연구에 대해 다루었다.

구마모토(熊本)현립대학의 오시마 아키히데(大島明
秀) 부교수가 ‘태평양전쟁 후 구마모토의 향토사 편찬활
동—향토문화연구소를 중심으로’라는 주제로 발표했다.
쇼와 23(1948)년 구마모토 현에 설립된 향토문화연구
소에서는 정·재계와 학계 인사들이 80명이 모여 ‘구마모
토인이라 무엇인가’에 대해 연구하는 학술기관 설립 운
동을 전개했다. 그러나 중심인물이었던 다마무로 타이

조(圭室諦成)가 메이지(明治)대학으로 이적해 활동은 3
년만에 쇠퇴했다.

토론에서는, 가고시마(鹿兒島)에서는 지금도 고등학
교 교사를 중심으로 한 다수의 작은 연구회가 활동 중
이라는 것과 구마모토의 향토연구는 박물관 설립으로는
이어지지 않았다는 점에 대한 지적도 있었다.

홋카이도(北海道)대학의 구와야마 다카미(桑山敬己)
교수가 ‘일본의 아이누 연구에 관한 작은 고찰’, 홋카이
도대학 아이누 선주민 연구센터의 야마자키 코우지(山
崎幸治) 부교수가 ‘잡지 <민족학연구>에서의 아이누 연
구—태평양전쟁 후부터 쇼와 40년대(1965~1974)까지’
를 테마로 태평양전쟁 전후의 아이누 연구의 문제에 대
해 발표했다. 쇼와 24(1949)년부터 수년간에 걸쳐 조사
한 일본의 민족학협회 사루다니(沙流谷)의 아이누 종합
조사가 중점적인 화젯거리가 됐다.

【보고자: 요셉 클라이너

(호세이대학 국제일본학연구소 겸담 연구소원·국제전략기구 특별교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 5 回東アジア文化研究会

中国研究者から見た日本経済の歩み

—楊棟樑著『日本近現代経済史』の査読を通じて—

●報告者：郭 勇（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員、大連民族学院外国言語文化学院講師）

●日 時：2011 年 8 月 3 日（水）18 時 00 分～20 時 00 分

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

野口悠紀雄氏が提唱する「1940 年体制」において、「戦時体制は、戦後日本の高度成長の実現に本質的な役割を果たした。さらに 70 年代の石油ショックへの対応も 40 年体制があったからこそ可能になったものだ。また、80 年代後半のバブルは、この体制の矛盾が噴出したものと捉えることができる」、と述べている。ここでは、1940 年体制の是非はともかく、日本現代経済を研究する際、戦後に重点を絞るだけでなく、戦時経済、さらに 20 年代までさかのぼる必要性を示唆しているのではないと思う。

『経済史』は『広義の経済学』の一環で、現代の経済に対象を絞る『狭義の経済学』の中にだけ閉じ込められるべきではない」と永原慶二氏が主張するように、経済学研究において、経済史は極めて重要な地位を占めているのである。さまざまな資料を照らし合わせ、本当の事実を追求し、最後にそれを理論化するのが一般的である。

では、何故日本なのであろうか。中国の立場において、日本経済史研究の重要性はどこにあるのであろうか。この本の著者楊棟樑氏は次のように述べている。「日本経済の現代化過程が世界に見せたのは後発国としての『追い越せ』経済モデルであり、生産効率化を目標とする技術革新はこのモデルの中核的な存在である。しかし、技術革新などは『官主導』と『組織された市場』のもとで実現したもので、今では変わらざるを得ない状況にあって、日本がどのように対応していくのか中国経済には非常に参考になる」。

日本でもはやっていたマルクスの発展段階論から見ると、西洋の学者が考え出した学説がアジアでもっとも早く先進国になった日本の経済史を裏付けられるかどうか、あるいは、日本人学者の間でどのように認識されているのか、日本の隣国である中国の立場に立って研究するのは、非常に面白く、やりがいのあることである。

著者が「一本の幹線、二本の経済発展進路、三度の制度変革、四つの分析角度」ということを意識しながら本書を作成したことがこの本を読んだあと、よくわかった。一本の幹線というのは、官主導経済社会システムのことである。各時代において、日本政府がどのように日本社会経済に影響を及ぼしたかを本書の幹線とし、この幹線上で、さまざまな論題を、つまり横道を構造的に結んでいる。二本の経済発展進路というのは、一つは明治初期の文明開化に伴い、明治政府が殖産興業、富国強兵、脱亜入欧などの政策を推進し、世界列強になり、それから戦争の道を選んで最終的に敗北してしまうという進路と、第二次世界大戦後、日本

が平和国家への道を辿り、大きな経済発展を遂げてきたという進路のことであり、この二本の「道」で本書のアウトラインを描いている。三度の制度変革というのは、明治維新を通じて行われた社会変革、戦後型体制の立ち上げにより、ファシズムの終焉を迎える制度変革、そして今でも行われている「平成改革」のことである。四つの分析角度とは内外の態勢はどうなっているのか、どんな条件に制約されているのかという「条件制約」、社会及び経済制度はどういった変化があったのかという「制度変遷」、「経済進路」はどうなっているのか、そして行政の実績を分析、評価する「実績評析」のことであり、この四つの分析角度から本書を作成したと著者は前書で述べている。さらに、著者は本書の特徴を包括性、系統性、アカデミック性を重視したことにあると述べている。

本書は、第二次世界大戦終戦というところで二つに区切られ、主に日本における資本主義の成立、産業革命、独占資本主義、国家独占資本主義という流れで、日本の近代経済を解説している。大戦後の部分は戦後復興、高度成長、経済大国期、調整改革期の五段階で論じている。現代世界の経済は資本主義経済が主流であるため、この意味では日本資本主義の発展に重点を置いて考察、研究するのは当然であろう。しかし、日本における資本主義の成立期から現代に至るまでの長期にわたる日本経済史をこのような一冊でどの程度纏められるのかと思われるであろうが、実は、中国における日本経済史研究の現状から見ると、明治時代からの日本経済史の諸段階を均等に取り扱い、それぞれの段階の経済過程が次の段階あるいはその先の日本経済社会にどのように影響し、またどのように規定したのか、という視点から、本書では歴史的諸段階を設定し、経済社会の構造を大量のデータと史実に基づいて明らかにすること自体はむしろ 52 万字にも及ぶ本書の特徴の一つとすべきだと思う。これまで日本で最も有力な発展段階論としての地位を占めてきたのは、マルクスの社会構成体論だった。しかしながら、こうした社会構成対論は、日本の歴史学界においてさまざまな批判を受けたようである。確かに西欧を中心とするマルクス主義理論は日本社会においてそのまま適用しにくい面もあるようであるが、マルクス発展段階論は古代以来の世界史の発展の大筋をつかむうえで最も包括的で、高レベルの理論であることは否定できないであろう。

本書の特徴のもう一つとして、日本経済史の展開を法則性と特殊性を重視し、一貫した形で把握することにあると思う。たとえば、本書には、可能な限り諸段

東アジア文化研究会報告

階の社会的生産の様式を明確にするところがある。人間の行う個々の生産活動を可能な限りありのままに追及することは本書のような通史では決してできないが、大量の先行研究の成果をふまえて、社会的生産の様式を大筋捉えることはできていると思う。たとえば、幕末の社会的生産様式について、著者は、「資本主義生産様式はすでに出現しているが、しかしまだ家内制手工業から工場制手工業になる過渡的な段階にある」と述べている。さらに、経済史を語るに当たり、単に自然成長的な経済発展の問題として捉えることは全く不可能であり、内外の政治的契機によって、経済

のあり方も常に大きく影響を受けていることは言うまでもない。近代なら支配体制、社会的分業、身分編成、階級状況、また現代に入ると政府がとる経済政策、世界的政治態勢などを考慮しなければならない。本書はこうした考えに基づき、日本経済発展における諸問題だけでなく、社会的、政治的な問題にも必要な限り触れている。

【記事執筆：郭 勇（法政大学国際日本学研究所客員学術
研究員・大連民族学院外国言語文化学院講師）】



郭 勇 氏



左：王 敏 教授、右：郭 勇 氏



講義の様子



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

5th East Asian Culture Research Meeting of 2011

The Path of Japanese Economics as Seen by a Chinese Scholar: Examining A History of Modern Japanese Economics by Yang Dongliang

Presenter: GUO Yong (Visiting Academic Researcher,
Hosei University Research Center for
International Japanese Studies; Lecturer, Dalian
Nationalities University)

Date: Wednesday, 3 August 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies)

A History of Modern Japanese Economics, written
over 8 years by Yang Dongliang of Nankai University
has 2 parts with World War II as the dividing line, firstly

explaining modern Japanese economics in the order:
the establishment of capitalism in Japan, the industrial
revolution, monopolistic capitalism and national
monopolistic capitalism. The post-war part discusses
the 4 stages of post-war revival, great growth, economic
superpower, and adjustment reforms. Attention is duly
given to the development of Japanese capitalism, economic
capitalism being mainstream in the modern world. The
book thus sets its historical stages, shedding light on the
structure of economic society through large amounts of
data and historical fact. It describes the shift from one
stage to the next, clarifying the mode of social production
in each stage. The author is conscious of “1 main route, 2
courses of economic development, 3-times system reform,
4 angles for analysis”, producing the thorough book with
systematic and academic focus. There are extremely few
Chinese scholars who write on the history of modern
Japanese economics, and this work will wield much
influence in research of Japanese economics in China.

Report by: GUO Yong (Visiting Academic Researcher, Hosei
University Research Center for International Japanese
Studies; Lecturer, Dalian Nationalities University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’
的现状——以东亚地区为中心”

2011 年度 第 5 次东亚文化研究会

中国学者眼中的日本经济变迁 ——研读杨栋梁著《日本近现代经济史》 之后

报告人：郭 勇（法政大学国际日本学研究所客员学
术研究员、大连民族学院外国语言文化学院
讲师）

日 期：2011年8月3日（星期三）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲义室

主 持：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

由南开大学杨栋梁教授耗时八年撰写的这本《日本近
现代经济史》中，以第二次世界大战结束作为一个分界线，

战前主要围绕日本资本主义的成立、产业革命、垄断资本
主义、国家垄断资本主义进行阐述；战后分为战后经济
复兴、经济高度成长、经济大国期和调整改革期四个阶段。
现代世界经济的主流是资本主义经济，从这个意义上说，
以日本资本主义的发展作为考察、研究的重点是理所当
然的。本书通过设定各个历史阶段，基于大量的数据和
史实阐明了经济社会的构造，并对各个阶段的转变过程
进行了介绍，最终逼真属实的勾勒出各个历史阶段社会生
产方式的轮廓。作者本着“一条干线，二条经济发展道
路，三次制度变革，四种分析视角”的著书方针完成写作，
并充分重视了该书的全面性、系统性和学术性。在当前由
中国学者撰写的日本经济通史专著稀缺的研究现状下，该
书的出版无疑为中国的日本经济研究带来了一丝新意。

【执笔者：郭 勇（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员
大连民族学院外国语言文化学院讲师）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재-
동아시아를 기점으로

2011년도 제 5 회 동아시아문화연구회

중국 연구자가 본 일본 경제의 발걸음 —양 동량 저, <일본 근현대 경제사> 의 사독을 통해

보고자: 귀 용((郭 勇, 호세이대학 국제일본학연구소 객
원 학술연구원·다롄(大連)민족학원외국어언어문
화학원 강사)

일 시: 2011년 8월 3일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교
수)

난카이대학 양 동량 씨가 8년간에 걸쳐 완성시킨 <
일본 근현대 경제사>는 태평양전쟁을 기준으로 둘로 나
뉘, 태평양전쟁 전은 주로 일본의 자본주의 성립, 산업
혁명, 독점자본주의, 국가 독점자본주의 순으로 일본의

근대 경제에 대해서 설명했고, 태평양전쟁 후는 전쟁의
복구, 고도성장, 경제대국기, 조정개혁기 등 4단계로 나
뉘 논술했다.

현대 세계의 경제는 자본주의 경제가 주류이기 때문
에 이런 의미에서 일본 자본주의의 발전에 중점을 두고
고찰, 연구하는 것은 당연할 것이다. 이와같이 이 책은
역사적으로 각각의 단계를 설정하고 경제사회의 구조를
대량의 데이터와 사실에 근거해 밝혔다. 한 단계에서 다
음 단계로의 이행 과정을 해명한 뒤 각 단계의 사회적
생산양식을 명확히 했다. 저자는 “하나의 본 선, 두 개
의 경제발전 진로, 세 번의 제도개혁, 네 개의 분석 각
도”를 의식해 포괄성, 계통성, 아카데미즘을 중시해 집
필했다.

중국 학자의 근현대 일본경제 통사를 다룬 책이 매우
적은 가운데 출판된 이 책은 중국의 일본경제 연구에
일침을 가하게 될 것이다.

【기사집필: 귀 용(郭 勇, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학
술연구원·다롄민족학원외국 언어문화학원 강사)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 6 回東アジア文化研究会

日本政治研究の視座を考察する

——王振鎖・徐万勝『日本近現代政治史』を読む——

●報告者：及川 淳子（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員、日本大学博士（総合社会文化））

●日 時：2011 年 9 月 28 日（水）18 時 00 分～20 時 00 分

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

第 6 回東アジア文化研究会は、王振鎖・徐万勝『日本近現代政治史』をテキストとして、日本政治研究の視座に関する考察を報告した。テキストは、中国の日本研究専門家が執筆し、幕末から現代に至るまでの日本政治史を俯瞰した研究書である。江戸時代末期の幕藩体制から、日本がどのように政治の近代化を成し遂げ現在に至ったのかという問題に取り組み、政治体制や各時代の内閣についてその変遷を歴史的に分析した通史である。

全 10 章からなるテキストは、明治維新前後、戦時期前後、自民党政権時代という三つの時期に概括される。著者が強調する近現代日本政治の特色は、以下の二つである。

(1) 近現代日本政治の二面性

著者は近現代日本政治の民主化と現代化を評価し、自由民権運動、大正デモクラシー、戦後の民主化について詳細に論じている。一方で、日本の「民族主義」、「ファシズム」、「新国家主義」を厳しく批判し、明治維新後の日本が形成した「官制民族主義」が「天皇制軍国主義」へと発展し、「日本式ファシズム独裁体制」を確立して戦争へと突入したと結論づけている。日本の敗戦は「国家主義」の完敗であり、戦後、特に冷戦後は「新国家主義」の傾向が顕著だと述べている。

(2) 日本式の政治の民主化

テキストでは、①外的要因、②天皇制、③自民党による 55 年体制という三つの特徴が、近現代日本政治の民主化にとって重要な要素であったと論じている。中でも、テキストの最大の特徴ともいえる自民党研究について、著者は、戦後日本政治の本質は自民党の「一党優位制」であると主張している。

以上のようにテキストの概要を報告した上で、「日本政治研究の視座を考察する」と題し、報告者からの問題提起として述べたのは以下の三点である。

第一は、歴史の「連続性」と「非連続性」という問題である。日本の近現代を、明治—大正—昭和—平成という各時代や、戦前—戦後、55 年体制時代—崩壊後のように区分することは可能だが、歴史の断絶だけでなく「連続性」に注目することによって、日本政治の本質を再検討できるのではないかという問題提起である。

第二に、報告者が「伸縮する歴史」と仮定した歴史研究の課題設定に関する疑問である。テキストは、著

者の専門分野に関連して、55 年体制下の自民党政権に関する記述の割合が圧倒的に多い。中国人研究者が近現代日本政治を研究する際に、自民党の「一党優位制」に着目する理由として、中国の国内政治との関連性を指摘することができるのではないだろうか。自民党の長期政権や党内派閥政治に関する詳細な研究は、中国共産党による長期政権という政治空間にある中国人研究者にとって、政治的関心の高い研究課題ではないかと考える。

第三は、「歴史研究」と「同時代研究」との関連性である。「歴史研究」は過去の歴史に関する研究であると同時に、研究対象を考察する時点での「同時代研究」としての側面を有する。「歴史研究」は時代環境や問題意識による再検討が可能であり、「歴史研究」に内在する同時代性についての考察は、研究の視座を再考し、新たな分析を可能にするのではないだろうか。

報告後の参加者との議論では、日本政治の近代化、日本の中国侵略などの歴史的事実を確認した上で、しかし、「ファシズム」、「天皇制軍国主義」、「新国家主義」などの概念で日本政治を分析することに対しては批判的な意見が提起された。「ファシズム」の語源に立ち返り、当時の日本政治について、天皇、内閣、議会などの面から再検討する必要性や、「ファシズム」と「軍国主義」の比較検討について、さらに「象徴天皇」の政治性についても積極的な意見交換が行われた。参加した中国人研究者からは、日本国内で「中国脅威論」の議論があるように、近年の中国では日本の「新国家主義」に関する議論に注目が集まっている傾向があるという紹介があり、これらの認識の違いについても議論を深めることが可能となった。そのほか、日本が列強の植民地支配を受けることなくスムーズな近代化を果たし、自民党一党体制の下で経済成長を実現したことが、中国にとって非常に関心の高い研究課題だという指摘もあった。

今回の研究会では、日本人と中国人の参加者から率直な意見が提起され、活発な議論が展開された。歴史や政治の問題をはじめ、社会のあらゆる問題について意見交換ができる自由な言論空間の確立こそが、政治の民主化と社会の改革にとって不可欠の要件である。中国における日本研究の紹介という視座によって、多角的な議論が深まったことに感謝したい。

【記事執筆：及川 淳子（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員・日本大学博士（総合社会文化））】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 3 "Present-day 'Japan-consciousness': in
East Asia"

6th East Asian Culture Research Meeting of 2011

Considerations on Perspective for Conducting Research in Japanese Politics: Reading Wang Zhensuo and Xu Wansheng's *A History of Modern Japanese Politics*

Presenter: OIKAWA Junko (Visiting Academic Researcher,
Hosei University Research Center for
International Japanese Studies; PhD. Society and
Culture, Nihon University)

Date: Wednesday, 28 September 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies)

I presented my considerations regarding the
perspective for conducting research into Japanese politics
as seen in the text, *A History of Modern Japanese Politics*.
This book is written by Chinese specialists of Japanese

research, and gives an overview of Japanese political
history from Bakumatsu until the present day.

The text is divided into 3 periods: Meiji
Restoration, wartime, and the Liberal Democratic Party's
administration. The authors emphasise the below 2
characteristics of modern Japanese politics:

- (1) The two-sided nature of modern Japanese politics
- (2) The democratization of Japanese-style politics.

Having given a summary of the text, I raised the
following 3 points regarding its perspective for research
into Japanese politics.

- (1) Historical "continuity" and "lack of continuity"
- (2) "Extensible history" and the setting of themes for
historical research
- (3) The relatedness of "historical research" and
"contemporary research"

My presentation intended to show that "historical
research" possesses a dimension relating to the
"contemporary research" here. Honest opinions were
raised by participants during the research meeting, and I
am grateful for the lively discussion that ensued.

Report by: OIKAWA Junko (Visiting Academic
Researcher, Hosei University Research Center for
International Japanese Studies; PhD. Society and
Culture, Nihon University)

战略研究基础形成支援项目研究方法③“‘对日认识’的
现状——东亚地区为中心”

2011 年度 第 6 次东亚文化研究会

考察日本政治研究的观点

——王振锁 徐万胜《日本近现代政治史》
解读——

报告人：及川 淳子（法政大学国际日本学研究所客员
学术研究员、日本大学博士（综合社会文化））

日 期：2011年9月28日（星期三）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲习室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

第六次东亚文化研究会，以《日本近现代政治史》作
为本，笔者对于日本政治研究的观点做了简单的考察报
告。该书由中国的日本专家执笔，俯视了从江户时代末期
至近现代的整个日本政治史，是一本内容丰富的学术著

作。

该书重要内容分为明治维新前后、战争时期前后、
以及自民党政权时代的三个主要时期，笔者认为两位著者
强调的近现代日本政治的主要特点概括为以下两点。

- (1) 近现代日本政治的两面性
- (2) 日本式政治民主化

笔者报告该书主要内容之后，围绕日本政治研究的
观点提出了以下三个问题。

- (1) 历史的<连续性>与<非连续性>
- (2) <伸缩的历史>与历史研究的课题
- (3) <历史研究>与<同时代研究>的关联性

通过解读该书的结论，笔者认为<历史研究>就是研
究过去历史的同时，含有现阶段的<同时代研究>的性质。
最后与会者坦率地交流了各自的看法，展开了非常活跃的
讨论，在此笔者深表谢意。

【执笔者：及川 淳子（法政大学国际日本学研究所客员学术
研究员・日本大学博士（综合社会文化））】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재—
동아시아를 기점으로

2011년도 제 6 회 동아시아문화연구회

일본 정치 연구에 대한 고찰

—왕 췌췌(王振鎖), 췌 완성(徐万勝)
의 <일본 근현대 정치사>를 읽고

보고자: 오이카와 준코(及川淳子, 호세이대학 국제일본
학연구소 객원 학술연구원·니혼(日本)대학 종합
사회문화 박사)

일 시: 2011년 9월 28일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교
수)

제6회 동아시아문화연구회에서는 <일본 근현대 정치
사>를 텍스트로 일본 정치연구에 관한 고찰에 대해 보고
했다. 이 책은 중국의 일본 연구 전문가가 집필했고, 막부
(幕末) 말기부터 현대에 이르기까지의 일본 정치사를 조

감한 연구서다.

텍스트는 메이지(明治)유신 전후, 태평양전쟁 전후, 자
민당정권 시대라는 3개의 시기로 개괄되었고 저자가 강
조하는 근현대 일본 정치의 특색은 다음의 두 가지이다.

- (1) 근현대 일본 정치의 양면성
- (2) 일본식 정치의 민주화

텍스트의 개요를 보고한 후에 일본 정치 연구의 시좌
에 관한 보고자의 문제 제기는 다음의 3가지이다.

- (1) 역사의 '연속성' 과 '비연속성'
- (2) '인축하는 역사' 와 역사연구의 과제 설정
- (3) '역사연구' 와 '동시대 연구' 와의 관련성

'역사연구' 는 과거사 연구임과 동시에 연구 대상을 고
려하는 시점에서의 '동시대 연구'로서의 측면을 가지고
있다는 것이 보고의 취지다. 연구회에서 참가자들이 솔직
하게 의견을 제기하고 활발하게 논의가 이루어진 점에 감
사할 따름이다.

【기사집필: 오이카와 준코(及川 淳子, 호세이대학 국제일본
학연구소 객원 학술연구원·니혼대학 박사)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 7 回東アジア文化研究会

国家体制を支える制度としての「家」 —『日本近現代社会史』を媒介に—

- 報告者：李 潤沢（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）
- 日 時：2011 年 10 月 26 日（水）18 時 00 分～20 時 00 分
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

李卓著「日本近現代社会史」（叢書『日本現代化歷程研究』）は、「家」や特定の職業・性別集団など、社会の基本的な構成単位に焦点を当て、明治維新から「経済大国」になるまでの日本の発展過程を社会史的な視点から多面的に考察し、それぞれの構成単位の歴史的変容、近代化との関係性を明らかにする力作である。

本書は日本近現代社会史に関わる諸問題について著者が様々な機会に執筆した論稿のアンソロジーという側面が強く、五つの章で取り上げられたテーマは、天皇制、家制度、女性の地位、労使関係、戸籍問題など多岐にわたる。さらに、第三章には他の研究者が執筆した論文も含まれるため、前後の内容とやや不一致なところも見られる。しかし、中国国内の従来の政治学的・経済学的アプローチでは十分に検討しきれなかった日本の「社会的近代化」の歴史的意義を再認識するという著者の明確な問題意識は一貫している。その意味では、本書は中国の日本社会史研究に関する総体的理論ないし体系を提示するのではなく、「あくまで個別的なテーマに関するこれまでの個人的意見と感想をまとめた内容である」ため、日本近代の歴史を理解する上で、新しい社会的視点を提示することを目的としている、といえよう。

さて、本書を通じて著者が提示した視点を具体的に言えば、「近代性には、合理主義を背景とした産業化だけではなく、個人の自由と平等を最終目的とする社会的近代化も極めて重要」と纏めることができる。このような論点を検証するため、著者は主に明治維新から戦後までの日本「家制度」の沿革を取り上げ、次のような歴史的プロセスを描いた。——明治政府は産業化を強力に推進する際、「家」を社会の「末端管理機関」として機能させることで「個人主義」を抑制し、「富国強兵」という経済的近代化の目標を国民に自覚的に支持させることに成功した。しかし一方で、封建的「家父長家族制度」が意図的に強化されたため、「家」の秩序は個人の自由と権利を軽視する封建的主従関係から脱却できず、社会構成員である個人の社会的尊厳、自由意思、権利・義務の行使などを象徴とする社会的近代化が停滞した。このような社会的近代化と経済的近代化の間の著しいアンバランスに由来する不安定な社会発展は、日本の近代化にも著しい歪みを与えた。さらに、「家」による国民の自由と権利に対する制限、及び天皇の権威の絶対化は「日本を戦争の道へ導いた要因」として作用し、その最終形は 1930 年代から 45 年までのファシズムによる日本支配と戦争である。しかし、敗戦によって「家父長制度」を代表とした「家」の伝統的価値、及び政府の強制で制度化されてきた「家

族国家観」は一気に崩壊し、社会的近代化が急速に完成した。その結果、戦後の日本が「福祉国家」「平和国家」へと変貌し、経済大国までに成長した、と。ここから、跛行的な近代化は国を間違った道へ導く可能性もある、といった著者の指摘を読み取ることができる。また、このような論点は、本書が研究対象とした女性の地位や労使関係問題についての記述にも通じて強調されている。

本書では、著者は新しい史資料や調査に基づく独自の事実発見や独自性に基づく研究方法を提示していない。何しろ、日本社会史分野について日本側の研究者はすでに豊富な学問的成果を蓄積しているため、さらなる新しい学術的な貢献は決して容易ではないからである。しかし、本書の特徴は、単に既存の研究をまとめただけではなく、日本の近代化を分析するために、従来の研究による「経済学的」アプローチと「文化的」アプローチの 2 つに加えて、さらに「社会的」アプローチを提示したことにある。また、中国の社会的現状を意識しながら、著者は「社会的近代化」の重要性を明確に主張することによって、後に続く中国の日本社会史研究者に新たな課題を探る視点と素材を提供している。この点に本書の最大の意義があるといえよう。

【記事執筆：李 潤沢
（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



李 潤沢 氏

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

7th East Asian Culture Research Meeting of 2011
“Ie” as a Structure Supporting the
State System: As Seen Through A
History of Modern Japanese Society

Presenter: LI Runze (Visiting Academic Researcher, Hosei
University Research Center for International
Japanese Studies)

Date: Wednesday, 26 October 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies)

Li Zhuo's *A History of Modern Japanese Society* (in
History of Japanese Modernization Research Collection)
considers various aspects of the historical development
of Japanese society from the Meiji Restoration until
the present day “economic superpower”. In particular

it focusses on the basic structural unit of society, “Ie
(family)” and its history and relation to modernization
from a socio-historical perspective.

Due to the variety of subjects handled in each chapter
– which include the emperor system, the “family system”
leading on to position of women, and the population issue
– we can detect some inconsistencies in content. However,
previous political and economic research approaches in
China have failed to examine the historical importance
of Japan’s “social modernization”, and in its conscious
raising of such issues it shows coherence.

Despite not displaying any original research
methods or standpoints, or indeed any newly-discovered
material, the author uses the work to emphasise clearly
the importance of “social modernization” in relation to
China’s current social state, and in so doing has provided
the next generation of Japanese social history scholars
in China with the base on which to seek new issues for
research. We could say that the work is most significant in
this respect.

Report by: LI Runze (Visiting Academic Researcher,
Hosei University Research Center for International
Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’
的现状——东亚地区为中心”

2011 年度 第 7 次东亚文化研究会

中支撑国家体制的“家”制度
——以《日本近代社会史》为媒介

报告人：李 润泽（法政大学国际日本学研究所客员
学术研究员）

日 期：2011年10月26日（星期三）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲义室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

李卓的著作《日本近现代社会史》（收录于《日本现
代化历程研究丛书》）以日本从明治维新至成为“经济大

国”的社会发展历史作为研究对象，尤其是从社会学角
度对社会基本单位“家”的历史沿革以及与近代化的关系
等作了深入、全面的探讨。

由于各章节选取的题目从天皇制、“家”制度到女性
地位和人口问题等涵盖非常广泛，因此本书中难免出现内
容缺乏同一性的现象。但是，著者试图对中国国内以往
政治学、经济学研究中没有得到充分验证的“日本社会近
代化”历史意义进行再确认的问题意识始终贯穿了全文。

本书中著者并没有提出新的研究方法、视角或资料，
但却针对中国社会的现状旗帜鲜明的指出了“社会近代化”
的重要性、为后续的日本社会研究者提供了探索新课题的
素材。这一点可称为该著作最大的意义所在。

【执笔者：李 润泽

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재-
동아시아를 기점으로

2011년도 제 7 회 동아시아문화연구회

국가체제를 유지하는 제도로서의 ‘이에
(家)’

— <일본 근현대 사회사>를 매개로

보고자: 리 룬저(李潤澤, 호세이대학 국제일본학연구소
객원 학술연구원)

일 시: 2011년 10월 26일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년 관2 층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교
수)

리 줘(李卓) 씨의 저서, <일본 근현대 사회사> (<일
본현대화역정연구총서>)는 메이지(明治)유신부터 ‘경제
대국’인 오늘날에 이르기까지 일본 사회의 역사적 전개,
특히 사회의 기본적 구성단위인 ‘이에(家·가족)’의 역사,

근대화와의 관계성을 대상으로 사회사적 관점에서 다면
적으로 고찰한 역작이다.

각 장에서 다루어진 과제는 천황제, ‘이에(家) 제도’
에서의 여성의 지위, 인구문제 등 으로 다방면에 걸쳐서
다뤘기 때문에 내용이 일치하지 않은 부분도 있지만,
중국내 기존의 정치학적, 경제학적 접근에서는 충분히
검토되지 못했던 일본의 ‘사회적 근대화’의 역사적 의의
를 재인식한다는 문제의식은 일관하고 있다.

또한, 저자는 이 책을 통해 독자적인 연구방법이나 관
점, 또는 새로운 발굴자료를 제시하지 않았지만, 중국의
사회적 현상을 의식하면서 ‘사회적 근대화’의 중요성을
명확하게 주장함으로써 앞으로 계속될 중국의 일본 사
회사 연구자에게 새로운 과제를 찾을 수 있는 실마리를
제공했다. 이 점이 이 책의 가장 큰 의의라고 할 수 있
다.

【기사집필: 리 룬저

(李潤澤, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2011 年度第 8 回東アジア文化研究会

日本近代美術史に関する一考察

— 彭修銀『日本近現代絵画史』を媒介として —

● 報告者：川邊 雄大（法政大学沖縄文化研究所国内研究員、二松学舎大学非常勤講師）

● 日 時：2011 年 11 月 30 日（水）18 時 00 分～20 時 00 分

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

本発表ではまず、彭修銀『日本近現代絵画史』（楊棟梁主編『日本現代化歷程研究叢書』、世界知識出版社、2010 年 3 月。以下本書）について、内容紹介および書評を行った。

本書はおおよそ 330 頁、全 9 章からなっている。

- 第 1 章 日本近現代絵画史中の諸概念考証
- 第 2 章 日本近代絵画の曙光—江戸時代
- 第 3 章 明治初期の絵画
- 第 4 章 明治美術の 3 指導者
- 第 5 章 明治中期の洋画
- 第 6 章 明治中期の日本画
- 第 7 章 大正時期の絵画
- 第 8 章 昭和前期の絵画
- 第 9 章 戦後の日本絵画
- 附録 近現代日本絵画史年表
- 日本近現代主要画家および著作一覧表
- 主要参考文献
- 後記

このように、本書は主に幕末期から現代までの日本の絵画史について述べているが、第 3 章から第 6 章までが明治期の記述であり、全体の 3 分の 2 近くを占めている。以下、第 1 章から 6 章までを概観する。

第 1 章では、明治以降の日本における美術・絵画・日本画・洋画等の概念などについて述べ、続いて第 2 章では、江戸時代の洋画について蘭学・司馬江漢などを例に述べている。

第 3 章では、明治初期の洋画の先駆者として川上冬崖・高橋由一を挙げ、当時の洋画塾・工部美術学校・南画の流行などについて述べている。

第 4 章では、明治美術の指導者として、フェノロサ・岡倉天心・黒田清輝の 3 人についてそれぞれ言及している。

第 5 章および 6 章では明治中期の絵画について、洋画では明治美術会・白馬会・太平洋画会といった組織を中心に述べ、日本画については、画家では狩野芳崖・橋本雅邦、当時から始まった院展・文展などについて述べる。

このように、全体的には既存の日本美術史の域を出ない感もあるが、特徴として明治期に合計 5 回開催された内国勸業博覧会における美術部門の分類の変遷に注目するなど、日本美術の近代化について言及していることが挙げられる。

次に本発表では、明治以降、近代美術の範疇に含まれなかった書道について言及した。

明治 15 年、洋画家の小山正太郎が「書は美術にあらず」を『東洋学藝雑誌』第 8～9 号に投稿し、書道を芸術の範疇に入れるべきか否かという議論が発生している。一方、書道界としても書を工芸品などと同列に扱われることをよしとせず、明治 23 年に日下部鳴鶴は皇室技芸院の技芸員の推薦を受けたが拒絶している。

明治 39 年中井敬所はこれを受け、書道界はその後、文展（文部省美術展覧会）加入運動を実施するが拒絶されている。

このように、明治期に美術と書道は対立を経て、それぞれ別の道を歩み、現在にいたっている。

だが、この書道や南画は、漢詩とあわせて三絶（詩書画）と呼ばれており、明治前期（日清戦争以前）にはむしろ江戸時代よりも盛んであり、維新後は中国から大きな影響があった分野である。

幕末期、日本人としては高橋由一・安田老山・長井雲坪といった画家がすでに上海に滞在しており、維新後は岡田篁所（医師）・副島種臣（外交官）らが滞在している。

明治 9 年、東本願寺上海別院が設置され、日本から派遣された布教僧の中にのちに書家となる北方心泉がいた。別院には、圓山大迂（篆刻）・巨勢小石（南画）・内海吉堂（同）・諫山麗吉（洋画）・吉嗣拝山（文人）・鳩居堂安兵衛（筆墨工）・大倉雨村（領事館）・岸田吟香らが寓居もしくは出入りしており、主に上海文人（海上派）と交流した。いわば別院は日中交流の場となっていた。

吉堂は「私が明治十年に支那へ参りました時分は、まだ日本でなかなか南画が流行つておりましたが、上海へおつて見ると、画ががらりと変つて大に失望しました。」（黒田譲『名家歴訪録上篇』明治 32 年）と述べているように、海上派の評価は高いものではなかった。しかし、心泉と大迂は、当時日本には殆どなかった北碑派の書風と鄧完白風の篆刻をそれぞれ日本に持ち帰っている。

一方、幕末期の長崎には、徐雨亭・金嘉穂・林雲逵ら中国文人が来日していたが、維新後は東京や京阪に、王治梅・胡鉄梅・衛鏞生・陳味梅ら海上派文人が滞在していたほか、張滋昉・王治本・葉松石らが語学教師をしていた。また、明治 10 年には清国公使館が設置され、何如璋・黎庶昌・黄遵憲・楊守敬（明治 13 年来日）らが外交官として、日本文人との交流を開始している。

このほか、筆墨商の馮耕三（明治 5 年来日）は中国式の筆製法を、楊守敬は北碑派の書風をそれぞれ日本

にもたらした。

その後、心泉と大迂は第3回国博覧会（明治23年）に、それぞれ作品を出品・入賞する。当時の「圓山大迂書翰」（心泉宛、明治23年8月31日、金沢・常福寺蔵）には、「近時一六・鳴雀及柯竹等之諸家輩出シ天下之書林一変、世人刮目始テ六朝之妙所ヲ相覚リ申候。」と述べているように、碑学派が流行している。その後、第4回（明治28年）・第5回国博覧会（明治36年）においては書道の衰頹が目立ち、明治30年代に碑学派が主流を占めるようになる。

その後も、書家では日下部鳴鶴・中村不折・長尾雨

山・河合荃廬らも渡清している。なかでも長尾・河合は西冷印社の会員となっており、呉昌碩ら中国文人と交流を深めた。

このように、日本の近代美術を論ずる場合、当時の書道・南画も範疇に入れて論じられるべきであり、この分野は中国からの影響が大きかった点についても留意する必要があることを指摘した。

【記事執筆：川邊 雄大（法政大学沖縄文化研究所国内
研究員・二松学舎大学非常勤講師）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

8th East Asian Culture Research Meeting of 2011

Thoughts on Modern Japanese Art History: As seen through Peng Xiuyin's *A History of Modern Japanese Painting*

Presenter: KAWABE Yutai (Researcher, Hosei University
Institute for Okinawan Studies; Part-time
Lecturer, Faculty of Literature, Nishogakusha
University)

Date: Wednesday, 30 November 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies)

My presentation began with an introduction and
critique of the content of Peng Xiuyin's *A History of
Modern Japanese Painting* (in *History of Japanese
Modernization Research Collection*, 2010).

The book consists of 8 chapters, and discusses the

history of Japanese painting from the Bakumatsu era until
the present day. Two thirds is given to the Meiji period,
with focus on the 5 Domestic Industrial Exhibitions which
witnessed changes in classification of schools of art. It thus
emphasizes in particular the modernization of Japanese
art.

It then mentions post-Meiji calligraphy and Nanga
(Japanese painting originating in China) that are not
classed as modern art. Both were extremely popular in
early Meiji, and were genres that received influence from
China following the Restoration.

For example, Kitagawa Shinsen (calligraphy),
Maruyama Taiu (seal carving), Koseno Shoseki (Nanga),
Utsumi Kichido (Nanga), Isayama Reikichi (Western-style
painting), and the Japanese literati, Yoshitsugu Haizan and
Kishida Ginko resided in Shanghai during the 2nd decade
of Meiji, mixing with mainly Shanghai literati (Shanghai
School). Shinsen and Taiu brought back respectively
Northern-style script and Deng Wanbai-style seals that
were hitherto unknown in Japan.

This thesis on modern Japanese art thus indicates
that influence came not just from the West at this time, but
also from China.

Report by: KAWABE Yutai (Researcher, Hosei University
Institute for Okinawan Studies; Part-time Lecturer,
Faculty of Literature, Nishogakusha University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘対日認識’
の現状——以东亚地区为中心”

2011年度 第8次东亚文化研究会

对日本近代美术史的考察 ——以彭修银《日本近代代绘画史》为 媒介

讲 师：川邊 雄大（法政大学沖縄文化研究所国内研
究員、二松学舎大学文学部非常勤講師）

日 期：2011年11月30日（星期三）18:00-20:00

会 場：法政大学市谷校区 58年館2層 国際日本学研
究所讲習室

主 持：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

此次发表首先对彭修银所著《日本近代代绘画史》（杨
栋梁主编《日本现代化历程研究丛书》、世界知识出版社、
2010年3月。以下称该书）内容做了简要介绍和评价。

该书由8章构成，主要论述了幕末至现代的日本绘画
史，其中关于明治时代的叙述占全体内容的约3分之2。以
对明治时代召开的共5次国内劝业博览会中美术展分类变
迁进行阐述为例，作者聚焦日本美术近代化过程也是该
书的特征。此外，该书还介绍了明治以后未包含在近代美
术范畴内的书道和南画。两者在明治初期盛极一时，维新
后仍受中国大陆艺术的影响。例如，明治十年代北方心泉
（书道）园山大迂（篆刻）、巨勢小石（南画）、内海吉堂（南
画）、諫山麓吉（西洋画）、吉嗣拝山、岸田吟香等日本文
人先后滞留上海，与上海文人（海上派）展开交流。其中
心泉和大迂更是将当时日本国内尚未展开的北派书法和邓
完白的篆刻引入了日本。

作者认为，讨论日本近代美术时不但要看到来自西
洋的影响，也应留意到同时代书道、南画中的中国因素。

【执笔者：川邊 雄大（法政大学沖縄文化研究所国内研究員・
二松学舎大学文学部非常勤講師）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 변천—
동아시아를 기점으로

2011년도 제 8 회 동아시아문화연구회

일본 근대 미술사에 관한 고찰

—평 쉬우인(彭修銀)의 <일본 근현대 회화사>를 매개로

보고자: 가와베 유타(川邊 雄大, 호세이대학 오키나와
문화연구소 국내연구원, 니쇼가쿠샤(二松學舎)
대학 문학부 비상근강사)

일 시: 2011년 11월 30일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교
수)

본 발표에서는 먼저 평 쉬우인의 <일본 근현대 회화
사> (<일본현대화역정연구총서> 세계지식출판사, 2010
년 3월)에 대한 내용 소개와 서평을 했다.

이 책은 8장 구성으로, 주로 막부(幕府) 말기부터 현
대까지의 일본의 회화사에 대해 집필했다. 이 중 메이지
(明治) 시대의 기술이 전체의 약 3분의 2를 차지하고 있
다. 이책의 특징으로 메이지시대에 총 5회 개최된 국내

권업(勸業) 박람회의 미술부문 분류의 변천에 주목하
는 등, 일본 미술의 근대화에 대해서 언급하고 있는 것
을 들 수 있다.

다음으로는 메이지 이후 근대 미술의 범주에 포함되
지 않은 서예와 남화(南畵)에 대해 언급했다. 서예와 남
화는 메이지 초기에는 매우 번성했고 메이지유신 이후
에는 중국의 영향을 받은 분야이다.

구체적인 예로서, 메이지 10년대(1877 ~ 1886)의 상
하이에는 기타가타 신센(北方心泉, 서예), 마루야마 타
이우(圓山大迂, 전각), 고세 쇼우세키(巨勢小石, 남화)
우즈미 기치도(内海吉堂, 동), 이사야마 레이키치(諫山
麗吉, 서양화), 요시쓰구 하이잔(吉岡拜山) 기시다 긴코
(岸田吟香) 등의 일본 문인이 체류하고 있었고 주로 상
해문인(해상파)과 교류했다. 그중에서도 신센과 타이우
는, 당시 일본에는 거의 없었던 북과 서풍과 등완백풍
전각을 각각 일본으로 들여왔다.

이처럼 일본의 근대미술을 논할 때, 서양의 영향뿐만
아니라 당시의 서예와 남화는 중국의 영향을 받았다는
점에 대해서도 유의해야 한다고 지적했다.

【기사집필: 가와베 유타(川邊 雄大, 호세이대학 오키나와
문화연구소 국내연구원·니쇼가쿠샤대학 문학부 비상근강사)】



会場の様子

2011 年度第 9 回東アジア文化研究会 中国における日本文化史認識

- 報告者：姜 克實（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
- 日 時：2011 年 12 月 7 日（水）18 時 00 分～20 時 00 分
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

南開大学日本研究院が出版した『日本現代化歷程叢書』（楊棟梁他主編、全十巻、北京：世界知識出版社、2010）の中に、『日本近現代文化史』と題した一冊がある。同研究院教授趙徳宇教授と若手の大学院生三人によって執筆された、スケールの大きい著作である。江戸から現在までの四百年を論の対象に据えただけでなく、「文化」というすそ野の広い領域を覆うべく、内容も教育、思想、文学、芸術、宗教、社会など多岐にわたって展開する。日本学界の常識からいえば、若手数人によるこのような試みは、身の程を知らぬ軽挙に映るかもしれないが、一方、ヤマトのしがらみに束縛されない、大胆かつ自由奔放な、隣人の視線であるがゆえに、新鮮な感覚と異文化の刺激が至るところから感じとられる。

まず挙げられる特徴は、日本の近世と近・現代の歴史を、「文化」を媒介に連続的・構造的に捉えている手法である。日本の学界で掟となっている時代の区切すら突破し、あたかも「明治維新」という時代のゲートが存在しないかのようなのである。著者の意図は江戸文化の、日本近代に及ぼした影響の強調にあり、近世の洋学、儒学、国学と大衆文化から、日本近代文化の三つの要素——1. 庶民的文化、教養の素地、2. 西洋文化をはじめとする多元文化への親和性、3. 国学からみる日本文化民族主義の魂——を抉り出している。著者の目には、江戸の蘭学こそ日本近代開国への踏み台であり、逆に保守の国学は、近代以降の「極端な民族主義の根源」（61 頁）と映る。

第二の特徴は、文化現象によって歴史の流れを解釈しようとする試みである。文明は物質（才）で、文化は精神（魂）である。「魂」たる文化は先にあり、「才」たる文明は後に現れる、という本書の位置づけから、こうした意欲が感じとられる。

近代の日本は、アジア侵略の道をたどっていくが、著者はその原因を、文化の諸現象——江戸時代の国学、水戸学、幕末の「王政復古」、近代の天皇制、「国粋主義」の思想・教育——にあると指摘する。とくに「国家神道と武士道の結託」は、近代日本の悲劇を生みだした根本的原因だと著者は見る（112 頁）。このような視点から生まれたのは、本書が繰り返して強調する「文明と文化の悖論（パラドックス）」、あるいは「跛行の明治文化」説である。すなわち、近代の日本国家は、近代化、文明化（洋才）の道を目指す一方、その魂に据えた文化は、天皇制、国粋といった和魂である。そのため、文明は逆の方向に向かい、極端な民族主義、国家主義の近代、侵略拡張の近代が生み出された、と

いう。

やや問題を感じた点を二つ挙げよう。まず指摘したいのは、やはり「文化」と「文明」の位置関係である。文化という（魂）が文明（才）の先にある論は、唯心論式の解釈法であるだけでなく、それに依拠する、文化による近代文明解釈の試みも、方法的には新鮮ではあるが、本末転倒の歴史解釈に陥りやすいのではないかと評者は危惧する。明治維新は、著者のいう、江戸時代の内在的文化の蘊蓄のもたらした必然な結果なのか、それとも、内憂外患の客観的な政治情勢に促された歴史の変革なのか。日本の帝国主義侵略は、内在的天皇制、武士道、国粋主義がもたらした結果なのか、それとも、弱肉強食の国際情勢、および「領土狭小、資源貧乏、人口過剰」という「持たざる国」の危機感から生まれた、国家の必然な選択なのか。著者にしてもう一度慎重に考えてみる必要があるように感じる。

もし、日本近代の誤りのすべてを、「天皇制」、「共同体社会」、「神道、武士道」などの文化要素に帰してしまうと、日本は結局「天性の侵略民族」だ、という幼稚で悪意ある日本文化否定論になるのではないか。

第二点は、論の全体がきわめて構造的で、理論の展開が明快な反面、歴史の解釈には平板的で、一枚岩式の短絡さが見られる。各時代の、さまざまな歴史環境の変化、対抗する各種勢力の消長など、ダイナミックに展開する歴史の躍動、社会の息吹があまり感じられぬ。日本文化の連続性を強調するあまり、史的大変革を象徴する明治維新の意義が疎かにされ、また、明治初年の文明開化政策への反動を表す「明治 20 代」の概念や、戦後、日本民族文化再生の転回点となる「独立」の概念、文化的拮抗をも表す「逆コース」の概念も導入されていない。また、「公議政体」を近代思想、逆に同時期の「王政復古」を「歴史の後退」と簡単に片づけたり、明治文化の否定と大正文化の礼賛というような、非構造的な対極法も見られたりする。

多少の問題点があるにせよ、本書は決して安易なる日本文化論の受け売りではなく、長い時間をかけ、膨大な研究文献を調べ、咀嚼したすえの労作であり、若い外国人研究者による日本文化論へのチャレンジといえる。さらなる研鑽と研究を重ねて、次第に閉塞化に向かう日本国内の学問界に、外からの新風を吹き込む役割を期待してやまない。

【記事執筆：姜 克實
（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

9th East Asian Culture Research Meeting of 2011

Understanding of Japanese Cultural History in China

Presenter: JIANG Keshi (Professor, Graduate School of
Humanities and Social Sciences, Okayama
University)

Date: Wednesday, 7 December 2011, 18:00-20:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies)

There are 2 characteristics in the view of Japanese
culture by Chinese academia presented in *A History of
Modern Japanese Culture* (Beijing: 2010) written by
Zhao Deyu et al. One is its method of using “culture”

as a constant means of describing pre-modern and
modern Japanese history, and the other is its attempt to
explain history through cultural phenomena. Japanese
modernization is an inevitable consequence of the wisdom
and preparation given by Edo culture, and at the same time
the authors see modern Japanese militarism and the
invasion of Asia as stemming from cultural phenomena
such as the creation of the modern emperor system and
the “State Shinto and Bushido conspiracy”. This cultural
centrality theory is introduced by the authors’ theory of
the “counter-theories of civilisation and culture”. In other
words, whilst Japan trod the path of modern civilization,
the underlying culture was “yamato damashi”: the
emperor system, the way of the warrior, collectivism -
forming a distorted modern Japan. The authors consider
this paradox of civilisation and culture as a distinctive
feature of pre-war Japanese culture.

Report by: JIANG Keshi (Professor, Graduate School
of Humanities and Social Sciences, Okayama
University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’
的现状——东亚地区为中心”

2011年度 第9次东亚文化研究会

中国学界的日本文化史认识

报告人：姜 克实（冈山大学大学院社会文化科学研究
科教授）

日 期：2011年12月7日（星期三）18:00-20:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲习室

主 持：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

赵德宇等合著的《日本近现代文化史》（北京：世界
知识出版社、2010）一书中，体现出两个思想特徵。其一
是用文化作媒介，指出了日本的《近世=江戸时代》和近，

现代历史的连续性，其二是力图站在文化的角度上来观
察历史，解释历史，借以达到一种理论上的新突破。著
者认为，日本的近代化根出于江户文化的底蕴，有一种文
化史的必然性，同样，近代日本的军国主义和对外侵略
的根本原因，也出自于近代天皇制，或「国家神道和武士
道结合」这一种文化要素中。从此种文化中心论的历史解
释中，著者得出一个「文明与文化的悖论」的结论。即明
治后的近代日本，表面上走的虽是文明化，西洋化之路，
其指导理论却没能摆脱天皇制、武士道、集团主义等日
本文化的束缚，这种文明和文化的矛盾现象，是战前日本
文化的基本特徵。

【执笔者：姜 克实

（冈山大学大学院社会文化科学研究科教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구③ <일본의식>의 현재-
동아시아를 기점으로

2011년도 제9회 동아시아문화연구회

중국의 일본 문화사 인식

보고자: 지양 커쉬(姜克實, 오카야마(岡山)대학대학원
사회문화과학연구과 교수)

일 시: 2011년 12월 7일(수) 18:00 ~ 20:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 교
수)

자오 더위(趙德宇)의 <일본 근현대 문화사(북경, 세
계지식출판사, 2010년)>에 나타난 중국 학계의 일본 문
화관에는 두 가지 특징이 있다. 첫 번째는 일본의 근세
와 근대 역사를 ‘문화’를 매개로 지속적으로 파악하는
방법이고, 두 번째는 문화현상에 의해 역사를 해석하려
는 시도다.

일본의 근대화는 에도(江戸) 문화에 의해 축적되고
준비된 필연적인 것이었고, 마찬가지로 근대 일본의 군
국주의와 아시아 침략도 근대 천황제의 확립과 ‘국가
신도와 무사도의 결탁’ 등의 문화현상에 근본적인 원인
이 있다고 저자는 본다. 이 문화 중심론에서 도출된 것
이 저자의 ‘문명과 문화의 부조리’라는 이론이다. 즉,
근대 일본이 문명화 길을 걸으면서 그 바탕에 자리하고
있었던 문화는 천황제, 무사도, 집단주의 같은 ‘야마토
정신’이 있었기 때문에 왜곡된 일본의 근대가 형성되었

다고 말한다.

이러한 문명과 문화의 괴리독스는 태평양전쟁 전의
일본문화의 특징이라고 저자는 보고 있다.

【기사집필: 지양 커쉬 (姜克實, 오카야마대학대학원 사회문
화과학 연구과 교수)】



左から 王 敏 教授、姜 克實 教授

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

国際共同に基づく日本研究推進事業「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

第2回勉強会

キルヘル・ケンペル・シーボルトが描く日本の仏像

●報告者：ジョセフ・キブルツ(法政大学国際日本学研究所客員所員、フランス国立科学研究センター教授)

●日 時：2011年11月25日(金) 17:00～19:00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：安孫子 信(法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)

去る11月25日(金)、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」及び文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」採択「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクトの合同勉強会が開催された。今回は、フランス国立科学研究センター教授で法政大学国際日本学研究所客員所員のジョセフ・キブルツ氏を迎え、「キルヘル・ケンペル・シーボルトが描く日本の仏像」と題して行われた。

勉強会の概要は以下の通りであった。

日本の仏像などの図像を初めて描いた書物は、カルタリ(Vincenzo Cartari)の*Nova Seconda Imagini De Gli Dei Indiani*(インドの神々の図像)であった。本書は1589年に出版された*Imagini de Gli Dei Delli Antichi*(古代の神々の図像)の第2版に当たり、「インドの神々」という名称の下に、当時知られていた東洋の神の図像を収め、日本の場合には、仏教の観音などが描かれていた。観音図などは当然ながら中国にも存在したが、本書の中で「日本のもの」と明記されていることから、中国の仏像ではなく、日本の仏像が収録されていることが分かる。ヨーロッパにおいて日本の仏像が中国の仏像よりも早く絵画を通して紹介された理由としては、(1)16世紀末の時点で日本のキリスト教徒が約50万人と、イエズス会にとっては中国よりも理想的な布教の対象であったこと、(2)日本に赴いたイエズス会の宣教師が、日本で布教することを正統化するために「日本では悪魔を崇拝しており、そのような邪教の信者たちをキリストの教えに導くことが必要だ」と主張する際の証拠として観音図などを本国に持ち帰ったこと、などが考えられる。

*Imagini de Gli Dei Delli Antichi*を前史と捉えると、主体的に日本の仏像を絵画に描いた最初の人物がキルヒャー(Athanasius Kircher)であった。キルヒャーは中国から宣教師たちが持ち帰ったお札を基に、仏が左右に孔子と孟子を従える三尊図などを収録した*China illustrata*(中国の図像)を1667年に出版した。本書は高価であったが1500部程度が出版され、ヨーロッパで流通しており、当時のベストセラーといえる書籍だった。キルヒャーはルイス・フロイスなどの宣教師が本国に送った手紙で報告した日本の仏像の描写や、日本で作られた仏画を正確に模写して観音図などを描いた。その中には十手観音も含まれ、図には観音

の真言と巡礼の真言が描かれている。しかし、当時のヨーロッパでは梵語が知られていなかったため、手本とした仏画に記された梵語の意味を解読することができなかった。そのため、キルヒャーは十手観音を観音ではなく、多手多乳という特徴から、エジプトの神イシスと同じく、神々の母と理解していた。なお、キルヒャーの描いた十手観音は、日本の万福寺に収蔵されている、宝永元(1704)年の年号が書かれている『七俱胝佛母心大准提陀羅尼經』の見返しに類似する図がある。そのため、万福寺蔵の『七俱胝佛母心大准提陀羅尼經』に先行する写本の見返し切り取られてヨーロッパに渡り、それをキルヒャーが参考にして十手観音を描いたことが予想される。

さて、『日本誌』の邦題で知られる *The History of Japan*(1727)を著したケンペル(Engelbert Kaempfer)は、自著の中で日本の仏像などを描いている。その中の一つが牛頭天王であるが、実際には頭から角が生えるなど、牛頭天王そのものではなく、元三大師を牛頭天王と間違えて描いていることが分かる。それでは、何故ケンペルは牛頭天王と元三大師を間違えたのだろうか。住吉具慶の『都鄙図巻』の中にも、角大師のお札を家の柱に貼る光景が描かれているが、ケンペルはそのような様子を、江戸参府の途中に滞在した京都で目にした可能性がある。あるいは、祭礼の際に出島から長崎の市街地を見学した折に角大師のお札を目にし、通訳にたずねたものの、通訳が角大師を元三大師ではなく、誤って牛頭天王と伝えた可能性もある。実は、長崎の祇園社は17世紀半ばに上野の寛永寺の末寺になっていたが、江戸における比叡山という性格を与えられ、東叡山の山号を持つ寛永寺は、角大師のお札を用いて真言宗を関東に広めていた。その寛永寺の末寺になったことで祇園社でも角大師のお札が用いられていたのである。しかし、当時、祇園社という牛頭天王を連想するのが一般的であったため、通訳も当時の常識に基づいて、祇園社で配られた角大師のお札を牛頭天王と思い込み、ケンペルに伝えたことが考えられる。また、ケンペルは、*Amoenitatum Exoticarum*(邦題：廻国奇観、1712)の中で達磨の絵を描くとともに、ヨーロッパに初めて達磨の伝記をもたらした。その中で、ケンペルは達磨を「茶の始祖」として紹介し、黄檗流の筆致で達磨の絵を描写した。想像によって黄檗流の絵を描くことは難しいため、ケンペルは何かの方法で入手した日本のお札を持ち帰り、ヨーロッパで達磨の絵を描いたものと思われる。

一方、シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold)は、大著 *Nippon*(邦題：日本、1833-1851)

の中で、摩利支天の図を、「日本の守護神である戦いの神」とし、馬櫛神を「日本の馬の神」として描いている。シーボルトが葛飾北斎の『北斎漫画』を所有していたことはよく知られており、その中の図を手本として、*Nippon* において摩利支天や馬櫛神を描いていることは明らかである。また、シーボルトは、当時としては珍しい本ではなかった、様々な仏像の絵を収録した『仏像図彙』も所有しており、そこに描かれている七福神なども *Nippon* に収録している。なお、『仏像図彙』は、シーボルトの弟子であり、ヨーロッパの大学で初めて日本語を教授したヨハン・ホフマン (Johan Hoffman) によって 1870 年代に翻訳され、*Nippon* の別巻として刊行された。また、*Nippon* は、本文 5 巻、図版 3 巻からなる大部な著作であったが、1890 年代になって普及版が出版されたこともあり、1930 年代に至るまで、欧米の日本研究に強い影響を与え続けることとなった。

以上のように、絵画を資料とするとともに、それぞれの絵画が制作された時代の背景や、前後の状況を視野に入れたキブルツ氏の検討によって、キルヒャー、ケンペル、シーボルトの描いた日本の仏像の持つ意味や特徴が明らかになった。そして、当初は伝聞やわずかな資料に基づいて描かれていた日本の仏像が、やがて日本での資料の直接の収集を経て描かれるようになるという変化は、外国人の日本に対する興味や関心の高まりを傍証するといえよう。その意味で、今回のキブルツ氏の発表は、単にキルヒャー、ケンペル、シーボルトが描いた日本の仏像の考察にとどまらず、16 世紀から 19 世紀にかけての、外国人の日本への眼差しの変化をも辿るものでもあったといえるだろう。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



ジョセフ・キブルツ 教授



安孫子 信 所長・教授



講義の様子



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’:
into the Future”

**Japan Research Promotion Project based on International
Cooperation: Project "Complete Survey of Japanese
Buddhist Art Material Housed in European Museums
and its Use in Research of Japan and the Japanese View"**

Combined Lecture

"Japanese Buddhist Statues Described by Kircher, Kaempfer and Siebold"

Speaker: Josef KYBURZ, (Professor, French National
Centre for Scientific Research)

Date: Friday, 25 November 2011, 17:00-19:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies Seminar Room

Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies; Professor, Faculty of Letters)

Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-
consciousness’: into the Future”, and “Complete Survey

of Japanese Buddhist Art Material Housed in European
Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese
View" (MEXT “Japan Research Promotion Project based on
International Cooperation” project) held a combined lecture.
We welcomed Professor Josef KYBURZ who spoke on the
subject, "Japanese Buddhist Statues Described by Kircher,
Kaempfer and Siebold". His lecture began with the first ever
material to record images of Japanese Buddhist statues:
Vincenzo Cartari's *Nova Seconda Imagini De Gli Dei
Indiani* (Images of Indian Gods), and drew up a comparison
with images of Japanese Buddhist statues depicted in
Athanasius Kircher's *China illustrata* (1667), Engelbert
Kaempfer's *Amoenitatum Exoticarum* (1712) and *The
History of Japan* (1727), and Philipp Franz Balthasar von
Siebold's *Nippon* (1833-1851), examining the characteristics
of each one. The lecture used the visual elements of Buddhist
statues and their images to trace changes in foreigners’
understanding of Japan from 16th into 19th century, and in
so doing demonstrated the effectiveness of such a method.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic
Researcher, Hosei University Research Center for
International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④ “‘对日认识’
的变迁——从古代到现代”

国际协作推进日本研究项目 “欧洲博物馆等所藏日本佛
教美术资料全面调查，及以此展开的日本、日本观研究”
共同讲演会

Kircher・Kaempfer・Siebold 描画的日本 佛像

报告人：Joesf. kyburz（法国国立科学研究中心教授）

日 期：2011年11月25日（星期五）17:00-19:00

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲习室

主持人：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长
文学部教授）

“用国际日本学的方法再讨论——对日认识的过去、
现在和未来” 研究方法(4) “对日认识的三角测量——面向
未来”，以及文部科学省“国际协作推进日本研究” 选定

项目“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查和以
此展开的日本、日本观研究” 讲座邀请到Joesf. kyburz
教授、作了题为“Kircher Kaempfer Siebold描画的日本
佛像”的报告。

该讲座例举了一系列收录日本佛像图画早期作品，
如Vincenzo Cartari的《Nova Seconda Imagini De Gli
Dei Indiani（印度众神像）》、Athanasius Kircher的
《China illustrata》（1667年）、Engelbert Kaempfer的
《Amoenitatum Exoticarum（1712年）》和《The History
of Japan》（1727年），以及Philipp Franz Balthasar
von Siebold的《Nippon》（1833-1851年），对这些作品中
描画的日本佛像做以比较、并整理出各自特色。通过对16
至19世纪佛像等视觉要素的解读描画出当时各国对日本
的理解和变迁，这一研究手法的有效性再次得到验证。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구④ <일본의식>의 변천—
고대에서 근대로

국제공동에 입각한 일본연구 추진사업 ‘유럽의 박물관 보관 일
본 불교미술 자료의 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관의 연
구’ 프로젝트

합동강연회

키르허, 캠퍼, 시볼트가 그린 일본의 불상

보고자: 조셉 키부루즈 (프랑스 국립과학연구센터 교
수)

날 짜: 2011년 11월 25일(금) 17:00~19:00

장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실

사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학
연구소 소장 문학부 교수)

‘국제 일본학 연구방법에 따른 <일본의식>의 재검토
—<일본 의식>의 과거·현재·미래’ 연구④ ‘<일본의식>의
삼각측량—미래를 향해’ 와 문부과학성 ‘국제 공동에 입
각한 일본 연구 추진사업’ 채택된 ‘유럽의 박물관 보관
일본 불교미술 자료의 총 조사와 그에 따른 일본 및 일

본관 연구’ 프로젝트의 합동 강연회에서는 조셉 키부루
즈 씨를 초청해 ‘키르허, 캠퍼, 시볼트가 그린 일본의 불
상’이라는 제목으로 진행됐다.

이번 강연에서는 일본의 불상 등의 도상(圖像)을 처
음 수록한 서적인 카르탈리(Vincenzo Cartari)의
Nova Seconda Imagini De Gli Dei Indiani (인도 신
들의 도상)을 시작으로 키르허(Athanasius Kircher)
의 China illustrata (1667년), 캠퍼(Engelbert
Kaempfer)의 Amoenitatum Exoticarum (1712년)
과 The History of Japan (1727년), 시볼트(Philipp
Franz Balthasar von Siebold)의 Nippon(1833~
1851년)에 그려진 일본 불상의 도상을 비교하고 각각
의 특징을 검토했다.

본 강연에서는 16세기부터 19세기에 걸쳐, 외국인의
일본에 대한 이해 변화를 불상과 그 도상이라는 시각적
요소를 통해 검토하는 방법이 시도됐고 그 연구의 유효
성이 확인됐다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

第3回勉強会

20世紀前半ドイツにおける日本文学と 日本神話の受容について

● 報告者：ユディット・アロカイ（ハイデルベルク大学日本語学科教授）

● 日 時：2011年12月19日（月）18：30～19：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

去る2011年12月19日（月）、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」の第3回勉強会が開催された。今回は、ハイデルベルク大学教授のユディット・アロカイ氏を迎え、「20世紀前半ドイツにおける日本文学と日本神話の受容について」と題して行われた。勉強会の概要は以下の通りであった。

ドイツ語圏における日本文学の本格的な受容は、1847年にオーストリア人のアウグスト・プフィッツマイヤー（August Pfizmaier）が柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』を翻訳したことに始まる。柳亭種彦の作品としては決して著名ではない『浮世形六枚屏風』が翻訳されたのは、プフィッツマイヤーがウィーン宮廷図書館に所蔵されていた数冊の日本語の文献の中の一冊を選んだことによる、という興味深い背景はあるものの、専門誌に発表されたため、この翻訳が社会的な話題になることはなかった。

19世紀末からは、日本語の作品から直接翻訳するのではなく、英語からの重訳によって日本文学を紹介する、という方法が一般的となった。その際、作品そのものが普遍性を有するとともに、エキゾチシズムに満ちた観点から眺めても読者を満足させる作品、あるいは「日本らしさ」を象徴する文学作品として、『源氏物語』がしばしばドイツ語に翻訳された。例えば、1899年には、フランツ・ブライ（Franz Blei）が *Der japanische Theegarten*（日本の茶園）の中で、ウィリアム・ジョージ・アストン（William George Aston）の英語の文献の資料に基づいて自伝風に日本を紹介するとともに、岡崎遠光が *Geschichte der japanischen Nationalliteratur: Von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart*（日本の国民文学の歴史：最古の資料から現在まで）を執筆し、日本文学史を概観した。1906年にはカール・フローレンツ（Karl Florenz）が『源氏物語』の部分訳を行い、1911年には、マクシミリアン・ミュラー＝ヤブシュ（Maximilian Müller-Jabusch）が、末松謙澄が1882年にロンドンで出版した『源氏物語』の部分訳に基づき、*Die Abenteuer des Prinzen Genji: Ein altjapanischer Roman*（源氏の君の冒険：昔の日本の小説）と題する翻訳を出版した。この中でミュラー＝ヤブシュは当時の日常的で平易なドイツ語を用い、官職や衣服などは日本語をそのままアルファベットで表記して詳細を注釈の中で説明するという方法を採用し、和歌は散文体で内容を重視

して翻訳し、適宜主語や動作の対象などを補うことで文意を明瞭にする訳出を行った。さらに、1937年には、ヘルベルト・エゴン・ヘルリチュカ（Herberth Egon Herlitschka）が、アーサー・ウェイリー（Arthur Waley）の1935年の翻訳をもとに、『源氏物語』の「桐壺」から「幻」までをドイツ語に訳して出版した。ヘルリチュカの翻訳はウェイリーの独創的な翻訳に基づいているため、話の筋は『源氏物語』そのものから逸脱しがちであるが、1995年には第4版が発行されるなど、現在、ドイツ語圏で最も流通している『源氏物語』の翻訳となっている。第二次世界大戦後には、1947年にワルター・ドナート（Walte Donat）が *Das junge Veilchen*（若いすみれ）と題して『源氏物語』の「若紫」を原文から全訳し、1966年にはオスカー・ベンル（Oscar Benl）がドイツ語圏で最初となる『源氏物語』の全訳 *Die Geschichte vom Prinzen Genji*（源氏の君の歴史）を刊行した。しかし、ヘルリチュカに比べると、読者への影響力は限定的である。

次に、日本文学史の受容を概観すると、岡崎の *Geschichte der japanischen Nationalliteratur: Von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart* は、スサノオノミコトが詠んだとされる日本で最初の和歌から19世紀までの文学史を約150ページで解説した、簡便で表層的な書物といえる。一方、東京帝国大学で教鞭をとった経験もあるフローレンツの *Geschichte der japanische Litteratur*（日本文学の歴史）は、芳賀矢一や藤岡作太郎らの日本文学史関連の書物を参照して執筆された、650ページにわたる著作で、日本文学史上の主要な作品の要約や抄訳を記し、『源氏物語』を社会、文化、女性史などの観点から分析するなど、ドイツ語圏で最初の本格的な日本文学史の概説書である。フローレンツは『伊勢物語』から『源氏物語』への移行を「草庵から宮廷に移った感じ」と評価し、漢語による造語が氾濫した明治時代の「言葉の乱れ」に対する嘆きと反感という自らの考えを投影し、『源氏物語』の言葉に対して「柔軟で想像力に富む言葉」と好意的な態度を示している。ただし、作家と作品に現れる道德観を重視するフローレンツにとって『源氏物語』は「教訓性が全くない作品」であり、文学的な価値よりも、当時の社会の状況や宮廷の様子を描写した点で意義があるものだった。フローレンツの *Geschichte der japanische Litteratur* は1920年代までドイツ語圏における日本文学史関連書籍の最も重要な一冊であったため、「世界文学の重要な作品であり、社会史的には意味のあるものの道德的価値に欠ける」という『源氏物語』への評価も比較的影響力を持っていた。これに対

し、ウィルヘルム・グンダート（Wilhelm Gundert）は、1926年に『万葉集』から江戸時代の文学までを網羅する *Die japanische Literatur*（日本の文学）を著した。この中でグンダートはフローレンツと同じく文学史の解説と主要な作品の解釈や翻訳を行ったが、道徳よりも作品の構造を重視し、『源氏物語』についても、「場面の描写には優れているが登場人物の精神性を描き切れていないという欠点がある」と評価し、日本文学史やヨーロッパ文学に親しんだ戦前のドイツ語圏の読者に、「人間そのものではなく、人間と自然の調和を表現しているのが日本の文学だ」という印象を与えることになった。

さて、日本神話の受容に焦点を当てると、文学とは異なり最初から学問的な観点から導入され、記紀神話や各種の宗教説話などが翻訳された。フローレンツは1892年から1897年にかけて *Nihongi. Japanische Annalen*（日本紀：日本の年代記）と題して『日本書紀』を翻訳し、1919年にも *Die historischen Quellen der Shinto-Religion*（日本の神道の歴史的淵源）を著すなど、多くの翻訳と詳細な分析によって、文献学的な観点からの研究というドイツ語圏における日本神話研究の基礎を確立した。しかし、1920年代になると、賀茂真淵や会沢正志斎らの国粋主義的な神道が研究の対象となり、ホルスト・ハミツ（Horst Hammitzsch）やハインリッヒ・デュムレン（Heinrich Dumoulin）が1930年代から1940年代にかけて相次いで日本の神道や国学に関する研究成果を公表した。

ドイツの日本研究は政治の動向に強く影響されるという特徴を持っており、1936年にグンダートがハンブルク大学教授に就任する際に行った演説では、「日本の研究は個人の趣味ではなく、国家と国民のために

役立つように行われなければならない。日本国民の力はアジアに広く及んでおり、その原動力は天皇であるのだから、日本研究の課題は、日本の原動力としての天皇制の研究とならなければならない。そして、日本民族の成長の秘密を発見し、天皇制の仕組みを明らかにすることが必要であり、そうしてこそ日本はドイツの手本となる」という主旨の発言を残している。この演説は、ナチスと日本研究の関連や国学研究の流行とドイツの民族主義的な傾向との関連を考える上で重要な課題を含んでいるが、「日本研究がドイツ国民に役立つ」という観点が初めて明確に示されたという意味でも、画期をなすものであった。しかしながら、戦後になると神道研究の代わりに仏教研究が主流となり、近代や現代の文学の翻訳が多くなったほか、1970年代以降日本語学科が各地の大学に設けられるようになるなど、政治的な側面から離れた研究がなされている。

以上のようなアロカイ氏の報告によって、ドイツ語圏における日本文学と日本神話の受容の過程が詳細に示されるとともに、英語からの重訳によって『源氏物語』や他の作品が紹介されたことや、文学の場合は道徳性が重視され、神話の場合は文献学的手法が用いられたことなど、分野や時代による特徴がいくつものものであったかが説明された。ドイツ語圏という一つの集団における日本の文学と神話の受容を通して、受容する側の興味や関心の所在、さらには日本に対する理解のあり方を示した点に今回の報告の意義が存するといえるだろう。

【記事執筆：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



ユディット・アロカイ教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project:
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’:
into the Future”.

3rd Study Meeting

“Acceptance of Japanese Literature and Myth in Germany in the Early 20th Century”.

Presenter: Judit ÁROKAY (Professor, Heidelberg University
Institute for Japanese Studies)
Date: Monday, 19 December 2011, 18:30-19:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for
International Japanese Studies
Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University
Research Center for International Japanese
Studies; Professor, Faculty of Letters)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on
Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-
consciousness’ in the Past, Present and Future” Approach
4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”

held its 3rd Study Meeting on Monday, 19 December 2011
in Seminar Room of Hosei University Research Center for
International Japanese Studies. This occasion welcomed
Professor Judit Árokay of Heidelberg University who
spoke on the “Acceptance of Japanese Literature and
Myth in Germany in the Early 20th Century”. Professor
Árokay’s presentation showed in detail the process of
acceptance of Japanese literature and myth in German-
speaking regions, and it also explained how the *Tale of
Genji* and other works were retranslated from English,
with emphasis on morality in the case of literature, and
use of bibliographical methods in the case of myth, etc. –
examples of the many characteristics determined by genre
and period. Observations into the acceptance of Japanese
literature and myth in the German-speaking world – as
one collective group - revealed the areas of its interests
and concerns, as well as its way of perceiving Japan, and
in these respects the presentation was greatly significant.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic
Researcher, Hosei University Research Center for
International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④“对日认识”三角
测量——面向未来

第3次学习会

20世纪前叶德国对日本文学及日本神话 的吸收

报告人: Judit Árokay (海德堡大学日语学科教授)
日 期: 2011年12月19日(星期一) 18:30-19:30
会 场: 法政大学市谷校园58年馆2层 国际日本学研
究所讲习室
主 持: 安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长
文学部教授)

2011年12月19日(星期一) 法政大学国际日本学研究

所讲习室中召开了“基于国际日本学方法重新讨论‘对日
认识’——‘对日认识’的过去、现在、未来方法论④对
日认识三角测量——面向未来”的第3次学习会。此次研
究会邀请到海德堡大学Judit Árokay教授,以“20世纪
前叶德国对日本文学及日本神话的吸收”为题作了精彩报
告。Árokay详细介绍了德语圈内日本文学、日本神话的传
播过程及各领域、历史时期的特点。例如,从英语转译
的《源氏物语》和其他作品的传播,文学领域重视道德性、
而神话领域重视文献手法等。介绍德语圈集团中日本文
学、神话的传播过程中吸收方的兴趣和关心所在、以及对
日本的理解,本次报告的意义深远。

【执笔者: 铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客员学数研究员)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 연구④ <일본의식>의 삼각
측량—미래를 향해

제3회 연구회

20세기 전반 독일의 일본 문학과 일본 신화의 수용에 대해

보고자: 유디트 아로카이 (하이델베르크대학 일본어학
과 교수)
일 시: 2011년 12월 19일(월) 18:30 ~ 19:30
장 소: 호세이대학 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제
일본학연구소 세미나실
사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학
연구소 소장·문학부 교수)

지난 2011년 12월 19일, 호세이대학 국제일본학연구
소 세미나실에서 ‘국제일본학 연구방법에 근거한 <일본
의식>의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래’의 연구
④ ‘〈일본의식〉의 삼각측량-미래를 향해’의 제3회 연

구회가 개최됐다.

이번 연구회는 하이델베르크대학의 유디트 아로카이
교수를 초청해 ‘20세기 전반 독일의 일본 문학과 일본
신화의 수용에 대해’라는 제목으로 진행됐다. 아로카이
교수의 보고를 통해, 독일어권에서의 일본 문학과 일본
신화의 수용과정이 상세히 밝혀짐과 동시에 영어에서 독
일어로 이중번역된 <겐지모토가타리(源氏物語)>와 몇
몇 작품이 소개됐다는 점, 문학에는 도덕성이 중시됐고,
신화에는 문헌학적인 방법을 이용한 점 등 분야와 시대
에 따른 특징이 어떠한 것이었는지 설명됐다.

이번 보고는 독일어권이라는 하나의 집단에서 일본의
문학과 신화 수용을 통해 수용하는 측의 흥미와 관심의
소재, 더 나아가 일본에 대한 이해 방식을 제시했다는
점에서 의의 있는 발표였다.

【보고자: 스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

国際共同に基づく日本研究推進事業「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

シーボルト旧蔵大英図書館所蔵『地蔵菩薩霊験圖』について —フリーア美術館所蔵『探幽縮図』および東京国立博物館 所蔵『地蔵佛感應縁起』をめぐって—

- 報告者：辻 英子（聖徳大学人文学部日本文学学科教授）
- 日 時：2011 年 10 月 14 日（金）17：00～19：00
- 会 場：法政大学九段校舎 3 階 遠隔講義室
- 挨拶：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼担所員、国際戦略機構特別教授）

今回の講演会は、文部科学省の「国際共同に基づく日本研究推進事業」に採択された、平成 22-24 年度にかけて行われる法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」の一環として企画された。三人目の講師は聖徳大学人文学部日本文学学科教授の辻英子氏が務めた。本プロジェクトの趣旨に沿い、ヨーロッパの各美術館・博物館に所蔵される日本美術作品の現地調査を踏まえ、その中から「仏教関係の絵巻」について講演を頂いた。講演のタイトルは「シーボルト旧蔵大英図書館所蔵『地蔵菩薩霊験圖』について—フリーア美術館所蔵『探幽縮図』および東京国立博物館所蔵『地蔵佛感應縁起』をめぐって—」である。講演の概要は以下の通りである。

イギリス・大英図書館での現地調査において発見された『地蔵菩薩霊験圖』（以下、大英本）が、どのような新知見をもたらしたのかを考察する。

大英本（縦 33cm、全長 1056cm）は、紙本淡彩色で、十一段十一図から成る。卷子装であったものを折本状に仕立て直されている。内容は北宋常謹撰『地蔵菩薩像霊験記』に基づく物語である。跋によると、元応のころ（1319-21）に、絵は巨勢光康、詞書は卜部兼好が担当した絵巻を、文化五年（1808）に沢崎右門が写したことがわかる。大英本はシーボルト旧蔵で、1868 年に同図書館の所蔵になった。

本絵巻と深く関わる作品として、東京国立博物館所蔵の『地蔵縁起』一卷と『地蔵佛感應縁起』一卷（以下、東博本）が知られる。『地蔵縁起』の内容は東博本に続くとみられる。大英本の内容は東博本に一致し、両者は同一の祖本を忠実に模している。しかし、梅津次郎氏の指摘によれば、東博本には詞書と絵が脱落している部分があるといい、その内容は不明であった。大英本の調査によって、脱落部分の存在が確認され、梅津氏の指摘の正当性が証明されるとともに、東博本の脱落部分に新たな資料を提示することが可能になった。大英本は東博本の脱落部分を有するので、原本により近い姿を留めていると考えられる。

次に、アメリカ・フリーア美術館所蔵の絵巻をみていきたい。同館には、大英本と関連する二つの絵巻があり、一つは『探幽縮図』と呼ばれる小絵巻で、大英本の「地蔵農夫にかはりて疵をかうふりたる事」の段のみの絵と詞書を収めている。もう一方は絵を住吉慶

恩、詞書を慈鎮和尚と伝える『地蔵菩薩縁起』（以下、フリーア本）で、ちょうど『探幽縮図』が収録する部分では詞書が失われ、絵のみが残っている。このことから矢代幸雄氏は、『探幽縮図』はフリーア本の今は失われている詞書を模したものとし、『探幽縮図』とフリーア本は伝来を同じくしたと結論した。

一方、梅津氏によれば、『探幽縮図』は東博本の祖本と思われる江戸時代に焼失した片山本の写しであるとし、両者は伝来をともにしたものではないという。片山本の写しとする説は確かめることはできないが、両者が伝来を異にすることは首肯される。そのことを念頭に置いて、『探幽縮図』の詞書の模写姿勢を大英本と比較すると、大英本と東博本との近似性は『探幽縮図』に比べると密と言える。

同様に、絵についての比較を試みると、『探幽縮図』の絵は、大英本と東博本に図様も彩色も一致するので、同系統の略模本であり、フリーア本はこれらとは系統を異にすると考えられる。

最後に、一連の絵巻の系統について考察する。東京芸術大学所蔵の『古畫地藏縁起』（以下、芸大本）は、絵だけの模本であるが、大英本や東博本等とともに『地蔵菩薩像霊験記』の内容を描いている。芸大本と大英本を比較すると、図様が一致するところもあれば、違う部分もみられることから、この二つは別系統の絵巻であることがわかる。

大英本の出現によって、東博本の脱落部分を補完し、大英本、東博本と『探幽縮図』がフリーア本と別系統の絵巻であり、芸大本と大英本も系統を異にするということが明らかになった。

大英本は国内に存在しない資料を提示するもので、これまで知られていた作品の再評価にもつながった。今後、本プロジェクトにおいても、現存する作品の再評価につながるような発見があることを期待したい。

なお、「大英博物館蔵『糸の行者』絵巻にみる王土王民思想と王法仏法相依論」や「ベルリン国立アジア美術館所蔵『扇面 平家物語』より「物怪之沙汰」のように、ヨーロッパに所蔵される絵巻の多角的な研究手法をも披瀝され、大変有意義なものとなった。

【記事執筆：神野 祐太
（法政大学国際日本学研究所センター客員研究員）】

Japan Research Promotion Project based on International Cooperation: Project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View”

“On *Jizo Bosatsu Reigen Zu* in the Siebold Collection of the British Library”

Presenter: TSUJI Eiko (Professor, School of Correspondence Education, Faculty of Humanities, Department of Japanese Culture, Seitoku University)

Date: Friday, 14 October 2011, 17:00-19:00

Venue: Hosei University Kudan Building 3F Remote Conferencing Room

Greeting: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

This special lecture was planned as part of the Hosei

University Research Center for International Japanese Studies project “Complete Survey of Japanese Buddhist Art Material Housed in European Museums and its Use in Research of Japan and the Japanese View” that was selected as MEXT “Japan Research Promotion Project based on International Cooperation” and runs from 2010 into 2012. The lecture was given by Professor Tsuji Eiko of School of Correspondence Education, Faculty of the Humanities, Department of Japanese Culture, Seitoku University, and the title was “On *Jizo Bosatsu Reigen Zu* in the Siebold Collection of the British Library: Relating to *Tanyu Shukuzu* of the Freer Gallery of Art and *Jizo Butsu Kan'o Engi* of the Tokyo National Museum”.

Prof. Tsuji considered *Jizo Bosatsu Reigen Zu* - discovered during her research at the British Museum. The scroll underwent a diverse route on its way to being housed in a European collection. She proposed that its existence necessitated a re-evaluation of hitherto known works.

Report by: JINNO Yuta (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)



辻 英子 教授



司会：ヨーゼフ・クライナー 特別教授



開会の挨拶（安孫子信所長・教授）



質疑応答の様子（石川透教授〔慶應義塾大学〕）

国际合作推进日本研究项目 “欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查, 及以此展开的日本、日本观研究”
Siebold 大英图书馆所藏《地藏菩萨灵验图》

报告人: 辻 英子 (圣德大学人文学部日本文化学科教授)

日期: 2011年10月14日 (星期五) 17:00-19:00

会场: 法政大学九段校舍3层 远隔讲义室

致词: 安孙子 信 (法政大学国际日本学研究所所长 文学部教授)

主持: Josef Kreiner (法政大学国际日本学研究所 兼所属 国际战略机构特别教授)

此次讲演会系文部科学省“国际协作推进日本研究

项目”内容——平成22至24年度法政大学国际日本学研究实施的“欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查, 及以此展开的日本、日本观研究”的一环。会中由圣德大学人文学部日本文化学科教授辻英子做了题为“关于 Siebold 大英图书馆所藏《地藏菩萨灵验图》——以弗瑞尔艺廊藏《探幽缩图》及东京国立博物馆藏《地藏佛感应缘起》为中心”的报告。

报告指出, 对大英图书馆调查中发掘的《地藏菩萨灵验图》进行考察, 或可为多种研究手法考察欧洲保存画卷、做出新评价提供可能。

【执笔者: 神野 祐太

(法政大学国际日本学研究中心客员研究员)】

국제공동에 입각한 일본연구 추진사업 ‘유럽의 박물관 보관 일본 불교미술 자료 총조사와 그에 따른 일본 및 일본관의 연구’ 프로젝트

영국 대영도서관 소장 <지장관음영험도>에 대해서

보고자: 쓰지 에이코(辻 英子, 세이토쿠(聖德)대학 인문학부 일본문화학과 교수)

일시: 2011년 10월 14일(금) 17:00 ~ 19:00

장소: 호세이대학 구단 교사 3층 원격강의실

인사: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)

사회: 요셉 클라이너(호세이대학 국제일본학연구소 겸담 연구소원·국제전략기구 특별교수)

이번 강연회는 문부과학성 ‘국제공동에 입각한 일본연구 추진사업’에 채택되어 2010년~2012년에 걸쳐 진

행되는 호세이대학 국제일본학연구소 ‘유럽의 박물관 보관 일본불교미술 자료 총조사와 그에 따른 일본 및 일본관의 연구’ 프로젝트의 일환으로 기획됐다.

세이토쿠대학 인문학부 일본문화학과 쓰지 에이코 교수가 ‘시볼트가 소장했던 <지장관음영험도(地藏菩薩靈驗圖, 현재 대영도서관 소장)>에 관해, 프리어 미술관 소장 <탐유축도(探幽縮圖)> 및 도쿄국립박물관 소장 <지장불감응연기(地藏佛感應緣起)>를 둘러싸고’라는 제목으로 발표했다.

영국 대영도서관 현지조사 중 발견된 ‘지장관음영험도’를 고찰하고, 다각적 연구방법을 통해 유럽에 소장된 에마키(繪卷)가 지금까지 알려진 작품의 재평가에도 영향을 미쳤다는 점이 확인됐다.

【기사집필: 진노 유타

(神野祐太, 호세이대학 국제일본학연구센터 객원연구원)】

ニュースレター NO.16 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

李 潤沢 (法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)

(韓国語翻訳)

金 英美 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)

法政大学国際日本学研究所 研究成果報告集『国際日本学』第9号

研究成果報告

- ユニセフ募金の成功にみる「義理」としての「恩返し」
～日本学からのアプローチ～.....安井 裕司
『蔗軒日録』にみられる中日書籍交流の一縮図.....陳 小法
日本化された台湾？中国化された台湾？あるいは日本化され中国化された台湾？
—文化マッピングと文化政策の弁証法的関係（下）
.....王 向華・邱 愷欣（翻訳：鈴木裕輔）

アプローチ1 小特集

- 倫理学・日本倫理思想史の観点からみた「日本意識」.....吉田 真樹
世阿弥能にみる日本意識.....竹内 晶子
地図から見る近世日本意識の変遷と「蝦夷地」.....米家志乃布
ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ？
——私と平賀源内はどのレベルで日本を意識するのか.....横山 泰子

若手研究者論文

- 近世知識人の「華夷」観—黄宗義と横井小楠を中心に—.....陳 毅立
翻訳の正体.....宗意 和代
「世」をむすぶリョングブン（霊供盆）—「霊供盆」から見える八重山の自然と人々の係わり—.....内原 英聡

研究アプローチ活動報告.....田中 優子, ヨーゼフ・クライナー, 王 敏, 安孫子 信, 小口 雅史
彙報



国際日本学叢書 16

2010年アルザス・シンポジウム報告『日本のアイデンティティ形成と反響—』

- 『日本のアイデンティティ形成と反響』刊行にあたって.....安孫子 信
Anthropology, Colonialism and National Identity in Japan:
Some Remarks on Their Systemic Relationship.....Hans Dieter ÖLSCHLEGER
シンポジウム「日本のアイデンティティ形成と反響—」
紛争のアイデンティティ—伊波普猷と柳田国男の思考における沖縄人... ローザ・カーロリ
Travel Guides to the Empire: The Production of Tourist Images in Colonial Korea.....PAI Hyung Il
端午の節句の変容：中国的から日本的へ、女性的から男性的への転換.....王 秀文
Ishibashi Tanzan's 'Small Japan Policy' and
His Notion of Japan in the Interwar Period.....SUZUMURA Yusuke
「やわらぐ国」日本という自己像.....小林ふみ子
Eloges du Japon et de la japonité au seuil du XVIIIe siècle
—Nishikawa Joken (1648-1724) et la culture de Nagasaki.....Annick HORIUCHI
Bones and Japanese Identity.....Timon SCREECH
“From Aizawa Seishisai's vision of Christianity to State Shintō”.....Josef KYBURZ
明治維新：発明された「復古」と、再生する歴史のメタファー.....川田 順造
Presse et identité d'état au début de l'ère Meiji.....Christiane SÉGUY
物語性によるアイデンティティの構築.....島田 信吾
西周による「哲学」の導入と日本という地平.....安孫子 信
周縁「日本」のアイデンティティ——丸山眞男の「古属」論を手掛りとして——.....星野 勉
国号「日本」「日の本」の起源とその意味、そして後代への影響—近年の国号論議の隆盛をうけて—.....小口 雅史



法政大学国際日本学研究センター 国際日本学研究所

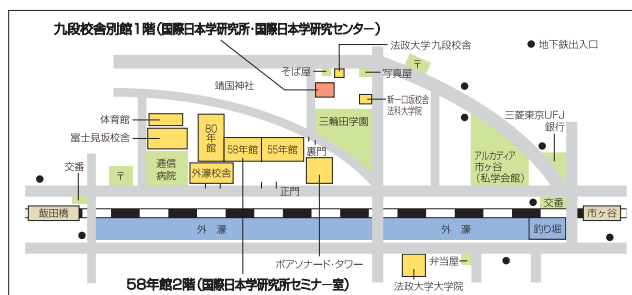
〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階

TEL: 03-3264-9682 FAX: 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: http://hijas.hosei.ac.jp



この冊子は再生紙を使用しています。